

小児慢性疾患のキャリアオーバーと 成育医療・看護に関する文献目録

駒松仁子

国立看護大学校；〒204-8575 東京都清瀬市梅園 1-2-1
komamatsu@adm.ncn.ac.jp

Bibliography of Continuing Pediatric Illness and Child Health and Development

Hitoko Komamatsu

National College of Nursing, Japan；1-2-1 Umezono, Kiyose-shi, Tokyo, 〒204-8575, Japan

政策医療の一分野である成育医療には、小児慢性疾患を抱えてキャリアオーバーした人(青年期・成人期に至った患者)の医療が包含されている。小児慢性疾患の子どもがキャリアオーバーして、小児医療から成人医療に移行する過程に関する看護研究は、必ずしも十分とはいえない。別稿で「小児慢性疾患のキャリアオーバーと成育看護の課題」という題目で、小児慢性疾患、キャリアオーバー、成育医療に関する文献の概観をした後、成育看護の課題について述べた。

筆者は国立看護大学校に着任して以来、成育看護の課題を検討するために医学、看護学、さらには近接領域の学術雑誌などにおける、「成育医療」「キャリアオーバー」に関連した文献を収集することに努めてきた(学術雑誌などを直接手にして関連領域の文献を収集した)。さらに得られた文献の参考・引用文献に記載された重要と思われる文献も入手し、文献目録を作成した。

文献目録作成の手続きは、まず『医学中央雑誌』(web版)を用いて、検索可能な1983～2008年の期間において、キーワードを「小児看護」「慢性疾患」「キャリアオーバー」「思春期」「青年期」「移行」「難病」として検索した。検索から得られた文献(原著、解説)に、筆者が収集していた小児内科系疾患(主な小児慢性疾患の種類別)および小児外科系疾患、成育医療、さらには慢性疾患、思春期に関する医学、看護学および近接領域の文献を追加して文献目録を作成した。

この文献目録が、小児期に発症した慢性疾患を抱えて青年期・成人期に至る人の臨床看護実践や臨床看護研究に関する文献検索に活用され、成育医療、成育看護の発展の一助になることを願う次第である。

この文献目録は、国立看護大学校教育研究費による成果であることを申し添えます。

I. 成育医療・看護

- 川田義男(1989). 小児総合医療施設(いわゆる小児病院)の現状と将来のあり方に関する中間報告概要. 日本小児科学会雑誌, 93(12), 250-258.
- 佐伯守洋, 本名敏郎他(1992). 国立小児病院の外科の現状からみた小児病院医療の課題. 日本小児外科学会誌, 28(4), 816-819.
- 小林登(1997). 思春期の子ども達の医療は誰がどこでみるべきか—成育医療における思春期医療の位置づけ. 小児内科, 29(5), 633-637.
- 秋山洋(1997). これからの小児病院—成育医療を目指して. こども医療センター医学誌, 27(2), 75-79.
- 久保千春, 野崎剛弘(1997). ライフサイクルと心身発達課題. 臨床と研究, 74(11), 2663-2667.
- 秋山洋(1998). 成育医療の目指すもの(胎児から生殖可能年齢まで). IRYO, 52(2), 69-72.
- 小林登(1998). 成育医療とは, life stage そして life cycle からみた小児医療の未来. 小児科診療, 61(6), 1057-1062.

- 白木和夫(1998). 小児医療から成育医療へ— 21世紀へ向けての新しい展開. 日本小児科学会雑誌, 102(10), 1043-1047.
- 小崎武, 武田武夫他(1998). 国立病院における小児医療のあり方に関する研究. 厚生省小児医療共同研究, 平成8年度報告書.
- 伊藤拓(1999). 小児難病とキャリアオーバー. 日本医師会雑誌, 122(9), 1351-1356.
- 秋山洋, 西間三馨他(1999). シンポジウム, 小児医療と成育医療. IRYO, 53(1), 24-41.
- 小林登(2000). 序: 小児医療から成育医療へ— 21世紀こそ子どもの世紀にしよう. 小児内科, 32(12), 2081-2084.
- 白木和夫(2000). 成育医療の概念と特徴—三次元医療から四次元へ. 小児内科, 32(12), 2089-2093.
- 高橋滋(2000). 小児医療の限界と問題点. 小児内科, 32(12), 2085-2087.
- 池田信二, 猪俣裕紀洋他(2000). 移植と成育医療. 小児内科, 32(12), 2195-2199.
- 田原卓浩(2000). 成育医療と医療環境(アメニティ). 小児内科, 32(12), 2200-2204.
- 秋山洋(2001). 成育医療の臨床と研究. 日本小児外科学会誌, 37(7), 1030-1034.
- 宮本信也(2001). <小児期から成人, そして次世代へ>こころのサイクル. 小児内科, 32(12), 2179-2185.
- 柳澤正義(2001). 日本における小児医療のあり方. 小児科, 42(1), 10-15.
- 柳澤正義(2002). 成育医療の概念とその背景. 小児看護, 25(12), 1567-1570.
- 山元恵子, 地蔵愛子他(2002). 成育医療における看護の役割. 小児看護, 25(12), 1571-1577.
- 柳澤正義(2002). 21世紀の小児医療—成育医療センターの開院を目前にして. 小児保健研究, 61(1), 3-8.
- 田原卓浩, 柳澤正義(2002). 成育医療と国立成育医療センター. 小児科, 43(8), 985-992.
- 富沢修一, 早川広史他(2002). 成育医療ネットワークにおけるキャリアオーバー症例の状況について. 日本小児科学会雑誌, 106(1), 99.
- 田原卓浩, 高山ジョニー郎他(2003). 成育医療が目指すもの. 小児内科, 35(増刊号), 54-57.
- 松尾宣武(2003). 成育医療センターのめざす医療の方向性. 医学のあゆみ, 206(9), 682-685.
- 久保隆彦(2003). 「成育医療」とは何か—成育医療センターのめざす周産期医療. 助産雑誌, 57(8), 625-630.
- 高山ジョニー郎(2003). 成育医療における「キャリアオーバー」. 治療, 85(9), 2490-2492.
- 岡崎光洋(2003). 小児のキャリアオーバーにおける臨床心理士の役割. 治療, 85(9), 2594-2597.
- 駒松仁子(2005). キャリアオーバーと成育医療, そして成育看護. 小児看護, 28(9), 1070-1075.
- 川島憲子, 本名敏郎他(2005). 成育医療におけるキャリアオーバー患者の外科的診療. 小児外科, 37(5), 588-591.
- 平良七恵, 林真由美(2005). 国立成育医療センターにおけるキャリアオーバー病棟の看護の実践と今後の課題. 小児看護, 28(9), 1275-1280.

Ⅱ. 慢性疾患

- 渡辺信夫(1986). 思春期・青年期の看護—思春期慢性疾患. 周産期医学, 15(2), 154-158.
- 岡茂(1986). 病虚弱児・者の「生き方」に関する研究について. 特殊教育学研究, 24(1), 37-43.
- 坂上正道(1988). 小児難病の治療と倫理. 小児科診療, 51(4), 905-912.
- 阿部知子(1988). 小児難病の治療と医の倫理. 小児科診療, 51(4), 913-918.
- 中野綾美(1994). 慢性疾患とともに生きる青年のノーマリゼーション. 日本看護科学会誌, 14(4), 38-50.
- 山下淳, Dewaraja, R. D. 他(1994). 長期療養児の心理的問題とその解決法. 小児臨床, 47(4), 611-618.
- 小林繁一, 宮尾益知他(1995). 青年期慢性疾患患者の社会的自立に向けて. 小児保健研究, 54(5), 607-611.
- 桃井真理子(1995). キャリアオーバー診療の問題点. medicina, 32(2), 226-238.
- 弘岡順子(1995). 思春期の患者をどうみるか. medicina, 32(2), 260-261.
- 森崇(1995). 思春期特有の症状にどう対応するか. medicina, 32(2), 262-264.
- 宮本信也(1995). 思春期患者のメンタルヘルスケア. medicina, 32(2), 283-285.
- 船川幡夫(1996). 入院中の慢性疾患とその教育. 育療, 4, 62-67.
- 平出さつき, 北村愛子(1997). 慢性疾患をもつ思春期患児の病気・入院体験. 日本小児看護研究学会, 6(2), 44-49.
- 中村美保, 兼松百合子他(1997). 慢性疾患患者と健康児のソーシャルサポート. 日本看護科学会誌, 17(1), 40-47.
- 武田浮子, 兼松百合子他(1997). 通院中の慢性疾患患児の日常生活—学校生活および療養行動の実際と気持ち. 千葉看護学会会誌, 3(1), 64-72.

- 武田鉄郎, 原仁(1997). 慢性疾患で入院している子どものセルフ・エフィカシーに関する研究. 小児の精神と神経, 37(1), 71-78.
- 小林信秋, 中井滋他(1997). 成人した難病児の小・中学校時代の体験に関する研究. 育療, 7, 45-49.
- 岩本テルヨ(1997). 看護婦のケアリング行動と患者の反応—慢性難治性疾患患者の経験の分析. 山口県立大学看護学紀要, 創刊号, 9-20.
- 岩本テルヨ(1997). ケアリングを成立させる看護婦の要件—慢性難治性疾患患者の経験の分析. 北里看護学誌, 3(1), 12-19.
- 武田鉄郎(1998). 慢性腎疾患患児の自己効力感に関する研究から. 育療, 10, 48-54.
- 兼松百合子(1998). 慢性的な健康問題をもつ子どもの生活と援助. 小児保健研究, 57(5), 629-634.
- 村上由則(1998). 病・虚弱児. こころの科学, 81, 56-57.
- 片山美香(1999). 思春期の慢性疾患患児の心理的特徴に関する研究—ボディイメージの観点から. 看護学統合研究, 1(1), 68-74.
- 古屋真弓(1999). 思春期の慢性疾患患児の心理的特徴に関する研究. 看護学統合研究, 1(1), 68-74.
- 片田範子他(2000). 小児期特有の疾患を持ちながら生活してきた患者の小児医療から成人医療への移行の実態と看護の役割—文献検索を通して. 平成11年度兵庫県特別研究助成金交付対象研究報告書.
- 中内みさ(2000). 思春期以前に発病した思春期慢性疾患患者の病気体験の語りにおける共通性. 教育実践学論集, 1, 13-22.
- 田辺恵子(2001). 慢性疾患児のセルフケアに関する研究動向. 特殊教育研究, 38(4), 29-35.
- 中内みさ(2001). 病弱児の病気体験のとらえ方の発達の変化と心理的援助. 特殊教育学研究, 38(5), 53-60.
- 加藤令子, 添田恵子他(2001). 小児特有の疾患をもつ患者の成人を対象とする医療への移行の実態と看護の役割. 日本小児看護学会誌, 10(1), 50-58.
- 吉川一枝, 瀧口京子(2002). 慢性疾患患児の思いと看護婦のかかわり—成人期に至った患児の入院体験を通して. 日本小児看護学会誌, 11(1), 31-36.
- 黒江ゆり子(2002). 病の慢性性 *chronicity* と生活者という視点—コンプライアンスとアドヒアランスについて. 看護研究, 35(4), 3-17.
- 黒江ゆり子, 藤澤まこと, 普照早苗(2002). 病の慢性性 *chronicity* と個人史—わが国におけるセルフケアから個人史までの軌跡. 看護研究, 35(4), 19-30.
- 楠永敏恵, 山崎喜比古(2002). 慢性の病が個人誌に与える影響—病の経験に関する文献検討から. 保健医療社会学論集, 13(1), 1-11.
- 足立智昭(2002). 難病の子どもの将来について—成長・発達に伴う生活上の問題について, 心理学からのアプローチ. 小児看護, 25(12), 1596-1600.
- 田代弘子(2002). 難病の子どもの将来について—成長・発達に伴う生活上の問題について, 看護からのアプローチ. 小児看護, 25(12), 1591-1595.
- 石崎優子, 小林陽之助(2002). 慢性疾患の子どもの心理社会的問題. 小児科, 43(6), 812-816.
- 佐藤和久(2002). 医療人類学からみた慢性疾患と人間. 看護研究, 35(4), 337-344.
- 石渡優子(2002). 幼少期から思春期に至るまでの患者の病気に対する認識と母親の養育姿勢. 神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録, 22, 343-350.
- 加藤令子(2002). 小児医療から成人医療への移行のための看護のアプローチ. 小児看護, 25(12), 1613-1618.
- 井上登生(2003). 地域におけるシステム. 治療, 85(9), 2590-2593.
- 岡崎光洋(2003). 小児のキャリアオーバーにおける臨床心理士の役割. 治療, 85(9), 2594-2598.
- 小村三千代(2003). キャリアオーバーした患者の増加. 看護学雑誌, 67(7), 650-651.
- 小林繁一(2003). 慢性疾患の心身医学. からだの科学, 231, 67-70.
- 谷川弘治, 松浦和代他(2003). 小児慢性疾患キャリアオーバーの社会的自立に関する研究—小児がん, 先天性心疾患, 小児期発症1型糖尿病専門医への調査結果から. 特別なニーズ教育とインテグレーション学会第9回研究大会発表要旨集録, 34-35.
- 谷川弘治, 稲田浩他(2003). 小児慢性疾患キャリアオーバーの社会的自立達成へのサポートシステム構築. 病気の子どもの医療・教育, 10(2), 84-89.

- 小林信秋, 二瓶健次(2003). 成人に達した病気や障害のある方の恋愛・結婚・妊娠・出産・子育てに関する調査研究. 育療, 28, 40-46.
- 小林信秋, 二瓶健次(2003). 成人に達した病気や障害のある方の恋愛・結婚・妊娠・出産・子育てに関する調査研究(第2報). 育療, 28, 47-53.
- 松森直美, 二宮啓子他(2003). 青年期の慢性疾患患者と家族の小児医療から成人医療への移行に対する意識. 神戸市看護大学紀要, 7, 11-21.
- 石崎優子(2003). キャリーオーバー患者を引き継がないケースにおける心理社会的問題の理解とその予防のために. 治療, 85(9), 168-171.
- 田中義人(2003). 思春期と慢性疾患. 小児科, 44(10), 1465-1468.
- 谷川弘治他(2004). 小児慢性疾患キャリーオーバーの社会的自立達成へのサポートシステム構築(2). 病気の子どもと医療・教育, 11(1), 33-48.
- 伊藤龍子, 及川郁子他(2004). 小児慢性特定疾患患者の療養環境の現状と課題—小学校・中学校・高等学校の養護教諭の面接調査. 第35回日本看護学会論文集(小児看護), 176-178.
- 加藤忠明(2004). 小児の慢性疾患について. 小児保健研究, 63(5), 489-494.
- 堂前有香, 中村伸枝(2004). 小学校, 中学校における慢性疾患児の健康管理の現状と課題—養護教諭を対象とした質問紙調査から. 小児保健研究, 63(6), 692-700.
- 小林信秋, 二瓶健次(2004). 成人に達した病気や障害のある方の恋愛・結婚・妊娠・出産・子育てに関する調査研究(第3報). 平成15年度成育医療研究(報告書9).
- 武田鉄郎(2004). 慢性疾患適応の支援. 育療, 30, 54-59.
- 黒江ゆり子, 藤澤まこと, 普照早苗(2004). 病の慢性性(chronicity)における「軌跡」について—一人は軌跡をどのように予想し, 編みなおすのか. 岐阜県立看護大学紀要, 4(1), 154-161.
- 黒江ゆり子(2004). 病の慢性性(chronicity)におけるアドヒアランス. Nursing Today, 19(11), 20-24.
- 銚之原昌(2004). 小児慢性疾患のキャリーオーバーと小児保健. 日本小児保健研究, 63(2), 85-91.
- 石渡裕子, 林洋子(2004). 患者の病気に対する認識と母親の養育姿勢の概念モデルから援助方法の検討—キャリーオーバー患者の事例から. 神奈川県立子ども医療センター看護研究集録, 28, 13-16.
- 杉澤栄, 林洋子他(2004). 小児病院に外来通院を続けるキャリーオーバー患者・家族の思いと看護の役割—初診時年齢別検討を中心に. 神奈川県立子ども医療センター看護研究集録, 28, 17-20.
- 石渡裕子, 林洋子他(2004). 小児病院に外来通院を続けるキャリーオーバー患者・家族の思いと看護の役割2—小児病院に望むこと. 神奈川県立子ども医療センター看護研究集録, 28, 42-44.
- 杉澤栄, 林洋子他(2004). 小児病院に外来通院を続けるキャリーオーバー患者・家族の思いと看護の役割3—成人医療施設への移行について. 神奈川県立子ども医療センター看護研究集録, 28, 45-48.
- 林洋子, 石渡裕子他(2004). 小児病院に外来通院を続けるキャリーオーバー患者・家族の思いと看護の役割4—病気や症状についての体験および将来について. 神奈川県立子ども医療センター看護研究集録, 28, 49-52.
- 今尾真弓(2004). 慢性疾患患者におけるモーニング・ワークのプロセス—段階モデル・慢性的悲哀(chronic sorrow)への適合性についての検討. 発達心理学研究, 15(2), 150-161.
- 後藤彰子(2004). 20歳を過ぎた慢性疾患を持ったキャリーオーバーの患者さんと家族. 日本小児科学会雑誌, 108(6), 843-849.
- 松尾ひとみ, 中野綾美他(2004). 小児期特有の疾患をもちながら生活してきた患者が小児期から成人期へ移行する過程の体験. 兵庫県立看護大学紀要, 11, 85-99.
- 松森直美, 二宮啓子他(2004). 小児医療から成人医療への移行に関する医療者の意識. 神戸市看護大学紀要, 8, 9-23.
- 谷川弘治, 永利義久他(2005). キャリーオーバーした人の社会的自立とQOL. 小児看護, 28(9), 1216-1226.
- 川島美保(2005). 慢性疾患とともに生きていく思春期の子ども居場所の脅かし. 看護保健科学雑誌, 5(1), 63-74.
- 石崎優子(2005). 思春期を迎える慢性疾患患児の心理的問題. 小児看護, 28(2), 190-193.
- 金丸友, 中村伸枝他(2005). 慢性疾患をもつ学童・思春期患者の自己管理およびそのとらえ方—質的研究 meta-study を用いて. 千葉大学看護学会誌, 11(1), 63-69.
- 古屋真弓(2005). 慢性疾患をもつ子どもの自立を考えた親への関わり. 子ども医療センター医学誌, 34(1), 14-16.
- 石浦光世(2005). 慢性疾患をもつ青年のソーシャルサポートの意味. 高知女子大学看護学会誌, 30(2), 2-11.

- 奈良間美保, 中村泰子(2005). 思春期における問題発生の予防—先天性疾患患者へのアプローチ. 小児看護, 28(2), 215-219.
- 柏木知子, 苗村光廣(2005). 小児慢性疾患患者の現状. 小児看護, 28(2), 227-231.
- 谷川弘治, 駒松仁子他(2005). 小児慢性疾患キャリアオーバーの社会的自立に関する研究—社会的自立意識の検討. 日本特殊教育学会第43回大会発表論文集, 176.
- 鈴木智之(2005). 生活史的時間の中の病—慢性疾患の社会学からみたキャリアオーバー. 小児看護, 28(9), 1091-1097.
- 中村恒子(2005). 慢性疾患のこどもを持つ親の体験から. こども医療センター医学誌, 34(1), 11-13.
- 黒江ゆり子, 藤澤まこと, 普照早苗(2005). クロニックイルネスにおける「二人して語ること」—病みの軌跡が形成されるために. 岐阜県立看護大学紀要, 5(1), 125-131.
- 谷川弘治(研究代表者)(2005). 小児がん等小児慢性疾患キャリアオーバーの社会的自立のサポートシステム構築. 平成14年度～平成16年度科学研究費補助金(基礎研究C(1))研究報告書.
- 田中千代(2005). 思春期患者における病状/治療方針の不確かさと看護のポイント. 小児看護, 28(2), 210-214.
- 石川陽子, 山田由佳他(2006). 対話的關係に基づいた慢性疾患を抱える思春期患者の看護. 第37回日本看護学会論文集(小児看護), 125-127.
- 村上睦美(2006). 慢性疾患のキャリアオーバーの問題点. 小児科, 47(10), 1429-1435.
- 松浦和代, 谷川弘治他(2006). 小児慢性疾患キャリアオーバーの社会的自立過程における相談概況. 第53回日本小児保健学会講演集, 376-377.
- 黒江ゆり子, 藤澤まこと他(2006). 看護学における「生活者」という視点についての省察. 看護研究, 39(5), 337-343.
- 及川郁子(2006). 小児慢性疾患患者の療養環境向上に向けて. 小児保健研究, 65(1), 5-10.
- 伊藤龍子(2006). 小児慢性疾患患者の療養環境の現状と課題. 保健の科学, 48(7), 487-491.
- 東野博彦, 石崎優子他(2006). 小児期発症の慢性疾患児の長期支援について—小児-思春期-成人医療のギャップを埋める「移行プログラム」の作成を目指して. 小児内科, 38(5), 962-968.
- 柗中智恵子(2006). 小児期からキャリアオーバーした難病患者がかかえる看護問題と介入. 小児看護, 29(2), 174-179.
- 中村伸枝, 遠藤数江他(2007). 慢性疾患をもつ学童, 青年の食習慣の特徴. 千葉大学看護学部紀要, 29(21), 21-24.
- 二宮啓子(2007). 小児病棟管理者に求められるキャリアオーバーする子どもと家族への介入への理解. 小児看護, 30(8), 1072-1077.
- 高谷恭子, 中野綾美(2007). 慢性疾患をもつ思春期の子どものアドヒアランス行動. 高知女子大学紀要(看護学部編), 56, 11-21.
- 加藤忠明(2007). 難病の子どもたちへの医療の現状と今後のあり方. 小児看護, 30(1), 10-14.
- 草野ひとみ(2007). 中学時代に入院経験した青年期にある慢性疾患患者のアイデンティティ地位の実態と当時の入院状況との関連. 第38回日本看護学会論文集(小児看護), 248-250.
- 黒江ゆり子(2007). 病のクロニシティ(慢性性)と生きることについての看護学的省察. 日本慢性看護学会, 1(1), 3-9.
- 黒江ゆり子(2007). 「クロニックイルネス」とは何か?. 看護学雑誌, 71(12), 1062-1070.
- 稲毛康司(2007). 小児から成人への移行期小児医療の特性. 小児内科, 39(9), 1292-1296.
- 武井修治, 白水美保他(2008). 小児慢性疾患におけるキャリアオーバー患者の現状と対策. 小児保健研究, 66(5), 623-631.
- 川崎友絵, 牛尾禮子他(2008). 学童期に慢性疾患を罹患した大学生の自然体験の有用性に関する研究. 小児保健研究, 67(1), 81-88.
- 黒江ゆり子(2008). 現代人とクロニックイルネス. 日本慢性看護学会誌, 2(1), 4-7.
- 野並葉子(2008). 慢性看護における Advanced Nursing Practices—現象学的人間観にたつて「苦悩する身体」を理解すること. 日本慢性看護学会誌, 2(1), 8-12.
- 谷川弘治(研究代表者)(2008). 成人前期小児慢性疾患患者の社会生活支援システムの構築と検証. 平成18, 19年度厚生労働科学研究費補助金基盤研究(c)研究成果報告書.
- 東野博彦(2008). キャリアオーバー・イズ・オーバー. 日本小児科医師会会報, 32, 182.

Ⅲ. 思春期

- 河合洋(1980). 思春期をめぐる諸問題. 臨床精神医学, 9(7), 567-572.
- 神庭靖子(1991). 思春期の発達過程における心理的ストレスと病気. 小児看護, 14(3), 302-307.
- 野間口千香穂, 梶山祥子(1993). 小児病棟における思春期の子どもの看護. 思春期学, 11(4), 315-318.
- 上田禮子, 前田和子(1993). 青少年の自己概念とリスク児(者)のスクリーニング. 茨城大学教育学部紀要(人文, 社会科学, 芸術), 42, 163-171.
- 弘岡順子(1995). 思春期の患者をどうみるか. *medicina*, 32(2), 260-261.
- 森崇(1995). 思春期特有の症状にどう対応するか. *medicina*, 32(2), 262-264.
- 宮本信也(1995). 思春期患者へのメンタルヘルスケア. *medicina*, 32(2), 283-285.
- 落合良行, 佐藤有耕(1996). 青年期における友達との付き合い方の発達的变化. 教育心理学研究, 44(1), 55-65.
- 高野晶(1997). 青年期の慢性身体疾患. 思春期青年期精神医学, 7(1), 58-66.
- 衛藤隆(1997). 序: 思春期の医療とは. 小児内科, 29(4), 513-514.
- 大前康彦, 上地安昭(1997). 思春期の同胞葛藤に関する研究. カウンセリング研究, 30(2), 93-102.
- 榎本淳子(1999). 青年期における友人との活動に対する感情の発達的变化. 教育心理学研究, 47(2), 60-70.
- 宮本信也(1999). 思春期のころ. 日本医師会雑誌, 122(9), 1361-1365.
- 榎本淳子(2000). 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連. 教育心理学研究, 48(4), 444-453.
- 鈴木龍(2000). 私たちの中の思春期青年期心性. 思春期青年期精神医学, 10(2), 115-123.
- 林洋子(2001). 思春期を迎えた入院児に見られる行動の特徴. こども医療センター医学誌, 30(2), 96-98.
- 加藤千津子, 芝木美佐子他(2002). 高校生の薬物使用の実態に関する調査(第一報) — 飲酒, 喫煙, および心理社会的変数との関連. 学校保健研究, 43, 482-494.
- 馬場礼三(2003). 学校における対応. 小児科, 44(2), 1469-1481.
- 丸光恵(2005). 思春期患者の発達課題と看護. 小児看護, 28(2), 137-144.
- 二宮啓子(2005). 思春期のセルフケア困難の特徴と看護. 小児看護, 28(2), 205-209.
- 松岡真里(2005). 思春期にある患者のインフォームド・コンセント, 意思決定と看護のポイント. 小児看護, 28(2), 220-226.
- 無藤清子(2005). 青年期における生涯発達の展望—エリクソン Erikson, E.H. の理論を背景に. 思春期青年期精神医学, 15(1), 15-24.
- 齋藤万比古(2005). 思春期のころの発達とその問題. 小児科診療, 68(6), 989-998.
- 堀川玲子(2007). 思春期医学—何が問題なのか. 小児科臨床, 60(1), 13-22.
- 関口進一郎(2007). 思春期の子どもたちの外来診療. 小児内科, 39(9), 1305-1309.
- 村市美代子, 肥田真理子(2007). 思春期・青年期患者への看護—発達課題を考えた取り組み. こども医療センター医学誌, 36(4), 196-200.

Ⅳ. 1 型糖尿病

- 丸山博(1985). 糖尿病—小児から成人へ. 小児科臨床, 38(2), 167-174.
- 一色玄(1989). 小児思春期糖尿病の管理における問題点. クリニカ, 16(10), 646-651.
- 新平鎮博, 一色玄(1990). 小児 IDDM の社会的・心理的問題—学校生活での問題点, 対処法を含む. *Diabetes Frontier*, 1(6), 756-760.
- 長谷川行洋, 土屋裕他(1990). 糖尿病患者の小児科から内科への移行—小児科の立場から. *Diabetes Frontier*, 1(6), 790-792.
- 武田倬(1990). 糖尿病患者の小児科から内科への移行—内科の立場から. *Diabetes Frontier*, 1(6), 793-794.
- 川田智恵子(1990). 思春期小児糖尿病患者の自己管理. 日本臨床, 48(増刊号), 1119-1125.
- 丸山博(1990). 小児期に発症してキャリアオーバーした糖尿病の管理. 小児内科, 22(2), 261-264.
- 松浦信夫(1991). 思春期糖尿病管理の問題点. 小児医学, 24(4), 599-613.
- 新平鎮博, 西牧謙吾他(1991). インスリン依存性糖尿病児の学校生活について. 小児保健研究, 50(6), 764-768.

- 松浦信夫(1992). 小児思春期糖尿病. 総合臨床, 41(9), 2570-2573.
- 兼松百合子(1993). 慢性疾患と思春期の看護—思春期の糖尿病を中心に. 思春期学, 11(4), 294-299.
- 松浦信夫(1993). 小児科から内科への患者の受け渡し方について. *Diabetes Journal*, 21(4), 19-21.
- 新平鎮博, 西牧謙吾他(1993). 糖尿病児の生活管理とその指導(1) —外来受診と心理相談. 大阪市立大学生生活科学紀要, 41, 121-128.
- 松浦信夫, 田嶋尚子(1993). ワークショップⅢ: IDDM をめぐる社会的問題, 司会の言葉: IDDM 患者をめぐる諸問題. 糖尿病, 36(増刊), 124.
- 青野繁雄, 一色玄(1993). ワークショップⅢ: IDDM をめぐる社会的問題1, 小児期発症 IDDM の進学, 就職, 結婚の現状. 糖尿病, 36(増刊), 124.
- 内潟安子(1993). ワークショップⅢ: IDDM をめぐる社会的問題2, 女性 IDDM の問題. 糖尿病, 36(増刊), 125.
- 武田倬(1993). ワークショップⅢ: IDDM をめぐる社会的問題3, 中国地方の現状. 糖尿病, 36(増刊), 125.
- 渥美義仁(1993). ワークショップⅢ: IDDM をめぐる社会的問題4, 小児期以降発症 IDDM の社会生活, 経済面の問題. 糖尿病, 36(増刊), 125.
- 三河誠(1993). パネルディスカッション: 糖尿病患者の小児科から内科への移行はどうあるのが理想的か1—地方病院小児科医からの意見. 糖尿病学会編, 糖尿病療養指導 '93, 219-222.
- 小野百合(1993). パネルディスカッション: 糖尿病患者の小児科から内科への移行はどうあるのが理想的か2—内科医からみた小児期発症糖尿病患者. 糖尿病学会編, 糖尿病療養指導 '93, 223-226.
- 青野繁雄(1993). パネルディスカッション: 糖尿病患者の小児科から内科への移行はどうあるのが理想的か3—大阪市立大学病院からの意見. 糖尿病学会編, 糖尿病療養指導 '93, 227-230.
- 前坂機江(1993). パネルディスカッション: 糖尿病患者の小児科から内科への移行はどうあるのが理想的か4—こども医療センターでの現状. 糖尿病学会編, 糖尿病療養指導 '93, 231-235.
- 武田倬(1993). パネルディスカッション: 糖尿病患者の小児科から内科への移行はどうあるのが理想的か5—小児科から内科まで一貫して診療している立場から. 糖尿病学会編, 糖尿病療養指導 '93, 236-239.
- 内潟安子(1993). パネルディスカッション: 糖尿病患者の小児科から内科への移行はどうあるのが理想的か6—東京女子医科大学糖尿病センターからの意見. 糖尿病学会編, 糖尿病療養指導 '93, 240-243.
- 新平鎮博, 西牧謙吾他(1994). 糖尿病児の生活管理とその指導(2) —思春期以降の現状; 進学・就職・転科・合併症. 大阪市立大学生生活科学紀要, 42, 135-140.
- 兼松百合子(1994). 糖尿病児の看護における成長発達の視点. 日本看護科学会誌, 14(1), 1-10.
- 今田進, 小林靖幸他(1994). 小児インスリン依存型糖尿病における血糖コントロールと成長率について. 日本小児科学会雑誌, 98(4), 849-855.
- 内潟安子(1995). <小児から内科へのキャリアオーバー診療>糖尿病. *medicina*, 32(2), 328-330.
- 中村伸枝, 兼松百合子(1996). 10代の子どものストレスと対処行動. 小児保健研究, 55(3), 442-449.
- 中村伸枝(1996). 10代の小児糖尿病患者の対処行動と療養行動, 血糖コントロールに関する縦断的研究. 千葉看護学会誌, 2(1), 23-29.
- 内潟安子(1996). キャリアオーバーした小児糖尿病の管理. 小児内科, 28(6), 853-857.
- 新平鎮博(1996). 小児 IDDM の社会的対応と問題点. 小児内科, 28(6), 849-852.
- 横田行史, 松浦信夫(1996). 小児期発症の思春期・青年期糖尿病. 診断と治療, 84(9), 1763-1767.
- 森朝子, 堀口真樹他(1996). 当院での小児期発症インスリン依存型糖尿病患者の内科転科後の経過について. *New Diet Therapy*, 12, 140-143.
- 青野繁雄(1996). IDDM 児の学校生活への対応. 小児内科, 28(6), 813-817.
- 浦上達彦(1996). 思春期以降の小児期発症 IDDM 患者の問題点と治療. 糖尿病, 39(1), 134.
- 内潟安子(1996). 小児科から転科した小児期発症 IDDM の特徴. 糖尿病, 39(1), 134.
- 松浦信夫, 青野繁雄(1996). 成人に達した小児期発症 IDDM の現状—全国実態調査の解析. 糖尿病, 39(1), 135.
- 武田淳子, 兼松百合子他(1997). 通院中の慢性疾患患児の日常生活—学校生活および療養行動の実際と気持ち. 千葉看護学会誌, 3(1), 64-72.
- 青野繁雄, 松浦信夫他(1997). 18歳以上に達した小児期発症インスリン依存性糖尿病患者の社会的適応および生活実態に関する疫学的検討. 糖尿病, 40(8), 547-554.

- 横田行史, 松浦信夫(1997). 思春期・青年期小児糖尿病の自己管理. 日本臨床, 55(増刊号), 460-464.
- 宮本茂樹(1997). 思春期における慢性疾患の管理—糖尿病. 小児内科, 29(5), 681-684.
- 佐藤明子, 内瀉安子他(1997). 精神的要因が血糖コントロールを困難にさせた思春期インスリン依存型糖尿病の2症例. プラクティス, 14(2), 192-196.
- 河口てる子, 丸山博他(1997). 青年前期・思春期インスリン依存型糖尿病患者の家族環境と糖尿病コントロール. 日本糖尿病教育・看護学会誌, 1(1), 7-16.
- 赤澤昭一, 松浦信夫(1997). ワークショップ3: 座長のことば—小児期・思春期・妊娠期における糖尿病治療の問題点. 糖尿病, 40(suppl.1), 136.
- 青野繁雄(1997). ワークショップ3: 小児期・思春期・妊娠期における糖尿病治療の問題点1—小児期発症糖尿病を合併症から守る. 糖尿病, 40(suppl.1), 136.
- 内瀉安子(1997). ワークショップ3: 小児期・思春期・妊娠期における糖尿病治療の問題点2—ヤング糖尿病の問題. 糖尿病, 40(suppl.1), 137.
- 佐中真由美(1997). ワークショップ3: 小児期・思春期・妊娠期における糖尿病治療の問題点3—IDDM 妊婦の治療上の問題点. 糖尿病, 40(suppl.1), 137.
- 穴沢園子, 柰保敦子他(1997). ワークショップ3: 小児期・思春期・妊娠期における糖尿病治療の問題点4—IDDM 妊婦の特徴. 糖尿病, 40(suppl.1), 138.
- 酒巻行, 赤澤招一他(1997). ワークショップ3: 小児期・思春期・妊娠期における糖尿病治療の問題点5—糖尿病における奇形の発症要因とその予防. 糖尿病, 40(suppl.1), 138.
- 豊田長康(1997). ワークショップ3: 小児期・思春期・妊娠期における糖尿病治療の問題点6—産科から内科・小児科医への提言. 糖尿病, 40(suppl.1), 139.
- 田中克子, 上原優子他(1998). IDDM 児の学校生活への対応患者に対する医療関係者, 家族, 友人等の態度に関する調査. 小児保健研究, 57(4), 558-564.
- 中村伸枝, 兼松百合子(1998). 10代の小児糖尿病患者のストレスと飲酒・禁煙・食べて気をまぎらす対処行動—健康児との比較と縦断的变化. 日本糖尿病教育・看護学会誌, 1(2), 76-83.
- 今野美紀, 兼松百合子他(1998). 日常生活において小児糖尿病患者の親が体験する困難なことについて—外来において親が看護婦に表現したことの分析. 日本糖尿病教育・看護学会誌, 2(1), 4-11.
- 谷洋江(1998). 小児糖尿病患者の療養行動における主体性に関する研究. 日本糖尿病教育・看護学会誌, 2(2), 88-96.
- 三木裕子, 村田敬他(1998). 思春期に血糖コントロールが改善した IDDM 患者の心理的要因. 日本小児科学会雑誌, 102(4), 483.
- 二宮啓子(1998). 思春期の糖尿病患児とその親の療養生活に対する認識の変化が療養生活・血糖コントロールに及ぼす影響に関する研究. 千葉看護学会会誌, 4(1), 39-46.
- 河口てる子, 伊達久美子他(1998). インスリン依存型糖尿病患者の自尊感情と糖尿病コントロールの関係. 日本糖尿病教育・看護学会誌, 1(2), 104-110.
- 西村真実子, 稲垣美智子他(1998). 思春期における糖尿病児のセルフケア問題—親への質問紙調査を通して. 金沢大学医学部保健学科紀要, 22, 163-168.
- 二宮啓子(1999). 糖尿病を持つ中・高校生とその母親の療養生活に対する認識—健康な中・高校生とその母親の健康生活に対する認識との比較. 神戸市看護大学紀要, 3, 39-46.
- 秋本倫子, 篠原良江他(1999). 教育入院における糖尿病患者の心理的变化—グループ医療の内容分析から. 糖尿病, 43(1), 63-67.
- 二宮啓子(2000). 療養生活に対する親子の認識の相違に焦点を当てた看護援助による効果—思春期の IDDM 患児とその親の認識の変化. 神戸市看護大学紀要, 4, 39-47.
- 森田秀子(2000). 病を受け入れられない女兒の苦しみ—症状に感情表現を託した糖尿病思春期事例. 看護学雑誌, 64(11), 1008-1012.
- 浦上達彦, 藤井眞一郎他(2000). 小児インスリン依存型糖尿病(IDDM) と食行動異常. 子どもの心とからだ, 9(1), 43-47.
- 内瀉安子, 瀧井正人(2000). ヤング糖尿病の食行動異常. 糖尿病, 43(1), 21-23.
- 羽倉稜子(2000). セルフコントロール指導. 糖尿病, 43(1), 25-27.

- 石井均(2000). 糖尿病の心理行動学的問題. 糖尿病, 43(1), 13-15.
- 本郷道夫, 内海厚(2000). 抑うつとインスリン抵抗性. 糖尿病, 43(1), 17-19.
- 津久井はるみ(2000). 糖尿病患者の心理ケア. 糖尿病, 43(1), 29-32.
- 松浦信夫(2000). 小児1型糖尿病のコントロールと長期予後. 小児科, 41(7), 1263-1271.
- 浦上達彦(2000). <小児期から成人, そして次世代へ>糖尿病—1型糖尿病. 小児内科, 32(12), 2170-2174.
- 中村伸枝, 出野恵子他(2001). 1型の小児糖尿病患者の肥満度とその関連要因および体重のとらえかた. 千葉看護学会会誌, 7(1), 1-6.
- 徳田友(2001). 診断後1年以内の10代糖尿病患者が知覚するソーシャルサポートについて. 千葉看護学会会誌, 7(2), 9-16.
- 稲田浩(2001). 内分泌疾患小児に対する教育と保健の課題. 病気の子どもと医療・教育, 9(2), 64-74.
- 白畑範子(2001). 小学校高学年・中学生・高校生の1型糖尿病患者のノーマリゼーションを促進する看護援助に関する研究. 千葉看護学会会誌, 7(2), 1-8.
- 三木裕子(2002). 1型糖尿病の子どもの小児医療から成人医療への移行—医学からのアプローチ. 小児看護, 25(12), 1623-1626.
- 菊池信行, 志賀健太郎(2002). 学校検尿による糖尿病スクリーニング. 小児内科, 34(11), 1615-1619.
- 二宮啓子(2002). 思春期の糖尿病患児と親の療養生活に対する認識の相違が血糖コントロールに及ぼす影響. 日本糖尿病教育・看護学会誌, 6(2), 104-112.
- 内田雅代(2002). 1型糖尿病の子どもの小児医療から成人医療への移行—看護からのアプローチ. 小児看護, 25(12), 1627-1630.
- 銭淑君(2002). 台湾における思春期糖尿病患者のセルフケアと親子関係についての研究. 千葉看護学会会誌, 8(2), 1-8.
- 宮川しのぶ, 津田朗子他(2002). 1型糖尿病患児の学校における療養行動1—療養行動に伴う困難感. 小児保健研究, 61(3), 457-462.
- 関秀俊, 宮川しのぶ他(2002). 1型糖尿病患児の学校における療養行動2—病気公表の療養行動への影響. 小児保健研究, 61(3), 463-469.
- 稲田浩(2002). 内分泌疾患小児に対する教育と保健の課題—各論. 病気の子どもと医療・教育, 10(1), 1-10.
- 南昌江(2002). 思春期1型糖尿病患者に対する最新の考え方と対応. プラクティス, 19(6), 648-652.
- 丸山博(2002). 糖尿病. 保健の科学, 44(4), 270-274.
- 西田佳世, 田辺恵子(2002). 成人期に達するまでの1型糖尿病患者が病気とともに生きる力を伸ばすための支援—学校関係者への提言. 育療, 25, 21-27.
- 横田行史, 松浦信夫(2003). 糖尿病. 小児科, 44(10), 1504-1509.
- 酒井真由美, 澤田愛子他(2003). 青年期発症1型糖尿病患者における「希望」の構成要素と看護的支援. 富山医科薬科大学看護学会誌, 5(1), 49-59.
- 国吉緑, 具志堅美智子他(2003). 小児糖尿病患者の療養行動と学校生活の実際. 日本糖尿病教育・看護学会誌, 7(2), 107-114.
- 銭淑君(2004). 青年期1型糖尿病患者に対するIT機器を活用したTelenursingの援助および評価. 千葉看護学会会誌, 10(2), 33-40.
- 内潟安子(2004). 糖尿病. 小児科臨床, 57(増刊号), 1417-1422.
- 内潟安子(2005). 1型糖尿病. 小児看護, 28(9), 1151-1154.
- 田中克子, 川村智行他(2005). 思春期1型糖尿病患者と保護者への性教育セミナーの効果. 小児保健研究, 64(3), 499-506.
- 宮本茂樹, 染谷知宏他(2005). 保護者の離婚, 死亡が血糖コントロールに与える影響およびひとり親家庭糖尿病患児の血糖コントロール状態について. 小児科臨床, 58(3), 339-341.
- 中村伸枝(2005). 1型糖尿病でキャリアオーバーした人の成育看護. 小児看護, 28(9), 1263-1267.
- 上野交代(2005). 1型糖尿病とともに歩んだ30年. 小児看護, 28(9), 1302-1307.
- 中野美代子, 穂坂真理(2008). 小児期・思春期に発症したキャリアオーバーした1型糖尿病患者の療養行動に対する感情. 日本糖尿病教育・看護学会誌, 12(2), 145-151.

V. 小児がん

- 飯塚忠史, 番浩他(1989). 我が子の悪性腫瘍告知を受けた母親の反応. 日本小児血液学会雑誌, 3(2), 129-134.
- 恒松由記子, 熊谷昌明他(1990). 小児急性白血病長期生存と晩期障害. 小児科診療, 53(8), 1854-1860.
- 細谷亮太(1990). 小児白血病治療の倫理ならびに社会心理学的考察. 日本小児血液学会雑誌, 4(5), 413-419.
- 細谷亮太(1990). 白血病患児の心理的側面. 小児内科, 22(7), 99-102.
- 恒松由記子, 熊谷昌明他(1990). 両親へのアンケート調査による小児がん長期生存者の Quality of Life. 癌と化学療法, 17(4), 878-886.
- 桜井實, 加藤充子(1990). 長期生存者への生活指導—進学, 職業の選択, 結婚など. 小児科診療, 53(12), 2909-2914.
- 福士貴子, 松井一郎他(1991). 小児がん長期生存患者と治療期間中の教育措置問題. 小児がん, 28(1), 97-99.
- 駒松仁子, 井上ふさ子他(1991). 小児がんの子どもと家族の実態調査(第一報) —両親・子どもへの病名告知について. 小児保健研究, 50(3), 353-358.
- 佐野信也, 川村智範他(1992). 小児悪性疾患患者への心身医学的関与—無菌室における骨髄移植患者へのリエゾン精神医学の経験から. 子どもの心とからだ, 1(1), 44-53.
- 岡敏明, 鈴木豊他(1993). 小児癌出身者に対する病名説明の試み. 小児がん, 30(1), 53-57.
- 太田茂, 杉浦康夫他(1993). 小児がん患児の心理的側面について—特に病名告知について. 小児保健研究, 52(6), 579-582.
- 恒松由記子, 東山由実他(1994). 小児がん患者へのがん告知とインフォームド・コンセント. 小児内科, 26(4), 77-81.
- 稲田浩子, 藤丸千尋他(1994). 年長児(思春期)への告知とインフォームド・コンセント—小児がん家族へのアンケート調査を中心に. 小児内科, 26(4), 111-115.
- 金子安比古, 松下竹次(1995). 小児がん医療における病名告知, インフォームド・コンセント, サポートケアの現状. 日本小児科学会雑誌, 99(2), 534-539.
- 大平陸郎(1995). <小児科から内科へのキャリアオーバー診療>悪性疾患のフォローアップ. medicina, 32(2), 310-311.
- 古谷佳由理, 三宅玉恵他(1995). 病名告知された白血病患児の病気に対する認識. 第26回日本看護学会論文集(小児看護), 31-33.
- 古谷佳由理, 三宅玉恵他(1995). 病名告知された白血病患児の親が抱く思い. 日本小児看護研究学会誌, 4(2), 63-68.
- 別所文雄(1995). 白血病—小児白血病長期生存者の生殖機能と子どもへの治療の影響. 小児科診療, 58(1), 31-35.
- 山田さゆり, 本郷輝明他(1996). 小児がん患者に対する病名説明とその問題点. 小児がん, 33(2), 167-170.
- 森秦二郎, 花田良二他(1996). 小児白血病, 悪性腫瘍患者の QOL に関するアンケート調査—I. 病名告知, 学校生活について. 小児がん, 33(4), 499-506.
- 森秦二郎, 花田良二他(1996). 小児白血病, 悪性腫瘍患者の QOL に関するアンケート調査—II. 現在の健康状態, 将来の不安について. 小児がん, 33(4), 507-511.
- 細谷亮太(1996). 小児がん患児のストレスとその対応. ストレス科学, 11(1), 26-28.
- 駒松仁子(1996). がんの子どもと家族へのよりよい看護の提供をめざした研究. 臨床看護研究の進歩, 8, 10-19.
- 早川香(1997). 小児がん患児の発症から退院後現在に至るまでに母親が経験した葛藤について. 日本看護学会誌, 6(1), 2-8.
- 星順隆, 内山浩志他(1997). 白血病治療と精神的ケア—Self help group の関わりを中心に. 小児内科, 29(2), 311-316.
- 月本一郎(1997). 小児白血病の長期生存例の QOL と問題点. 小児内科, 29(2), 321-325.
- 内山浩志, 藤沢康司(1997). 思春期における慢性疾患の管理—悪性腫瘍. 小児内科, 29(2), 703-707.
- 駒松仁子(1997). 悪性腫瘍とともに生きるこどもの看護—学校生活の問題を中心に. 育療, 9, 21-31.
- 谷川弘治, 駒松仁子他(1997). 骨髄移植後の学校生活復帰に関する調査研究. 障害者問題研究, 25(1), 31-43.
- 石橋朝紀子(1997). アメリカの文献をもとに小児がん患者の QOL を考える. 看護研究, 30(6), 505-515.
- 古谷佳由理(1998). 健康な小児が抱くがん, 白血病のイメージについて. 千葉看護学会会誌, 4(2), 39-46.
- 柴田理恵, 細谷亮太(1998). 小児癌患者の治療後の QOL. 聖路加健康科学誌, 6, 38-40.
- 加藤裕子(1998). 色々な苦しみを乗り越えて—骨髄性白血病とともに生きて. 育療, 11, 31-35.
- 別所文雄(1998). 小児のがん医療にみる小児医療の変貌. 日本小児科学会雑誌, 102(8), 853-856.
- 平山雅浩, 桜井實(1998). 小児白血病長期生存例における問題点. 小児科診療, 61(6), 1105-1109.

- 竹中義人, 田中英高(1998). 過去 10 年間に経験した小児悪性血液疾患の心理社会的問題についての検討. 子どもの心とからだ, 6(2), 87-94.
- 小澤美和, 細谷亮太他(1998). 小児がん患者への真実告知の心理的影響. 日本小児科学会雑誌, 102(9), 990-996.
- 古谷佳由理(1999). 外来における小児がん患者への病名告知に対する看護援助. 千葉看護学会誌, 5(2), 55-60.
- 白畑範子(1999). 血液・腫瘍疾患患児の母親のノーマライゼーション状況に関する研究. 日本小児看護学会誌, 8(2), 38-45.
- 東間未来, 松藤凡他(1999). 小児悪性固形腫瘍長期生存例の晩期障害. 小児がん, 36(2), 203-206.
- 細谷亮太(1999). 悪性腫瘍の告知と医療. 小児科, 40(2), 163-167.
- 富岡晶子, 中久喜町子(1999). 子どもに対するインフォームド・コンセントの現状と課題. 川崎市立看護短期大学紀要, 4(1), 47-57.
- 新山裕恵(1999). がん患児を支える母親の内的過程—発病期から末期以前まで. 看護研究, 32(2), 105-118.
- 小澤美和, 細谷亮太(1999). 子どもと家族への精神的サポート. 小児科診療, 62(8), 1231-1236.
- 前田美穂(1999). 晩期障害と二次がん. 小児科診療, 62(8), 1223-1228.
- 寺島美紀子(2000). 思春期の悪性疾患患児の療養行動における自主性の検討. 東北大学医療技術短期大学部紀要, 9(2), 239-244.
- 麦島秀雄(2000). <小児期から成人, そして次世代へ>血液疾患—白血病. 小児内科, 32(12), 2133-2137.
- 別所文雄(2000). <小児期から成人, そして次世代へ>悪性腫瘍. 小児内科, 32(12), 2143-2148.
- 気賀沢寿人, 田淵健他(2000). 血液科の過去・現在・未来. こども医療センター医学誌, 29(4), 183-187.
- 堀浩樹, 駒田美弘(2000). 小児白血病・がん患児に対するトータルケア. 日本小児血液学会雑誌, 14, 110-116.
- 寺島美紀子(2001). 入院中の悪性疾患患児の自主性に関わる要因. 東北大学医療技術短期大学部紀要, 10(1), 65-70.
- 堀越泰雄(2001). 白血病治療終了後の外来管理. 小児内科, 33(11), 1491-1495.
- 恒松由記子(2001). 小児白血病長期生存者の晩期障害. 小児内科, 33(11), 1506-1510.
- 三間屋純一(2001). 小児血液腫瘍疾患におけるインフォームドコンセント—小児患者への対応. 日本小児血液学会雑誌, 15, 150-160.
- 松下竹次, 関口典子他(2001). 病名の告知と心理的なサポート. 小児内科, 33(11), 1559-1562.
- 沖本由理(2001). 就職, 結婚と妊娠・出産. 小児内科, 33(11), 1563-1565.
- 藤井裕治, 渡邊千瑛子他(2002). 病気説明を受けた小児血液・悪性腫瘍患児に対する病気の理解度. 小児がん, 39(1), 24-30.
- 気賀沢寿人(2002). 第 105 回日本小児科学会学術集会シンポジウム 1: 小児慢性疾患の長期経過とケア—成育医療の視点から, 血液・腫瘍科. 日本小児科学会雑誌, 106(11), 1594-1598.
- 泉真由子, 小澤美和他(2002). 小児がん患者の心理的晩期障害としての心的外傷後ストレス症状. 日本小児科学会雑誌, 106(4), 464-471.
- 石本浩市, 藤田浩夫他(2002). 小児血液悪性腫瘍患者の長期観察外来. 小児科診療, 65(2), 315-319.
- 別所文雄(2002). 長期生存している小児白血病患児の QOL の向上. 小児科, 43(8), 1076-1085.
- 石本浩市, 吉田雅子(2002). 小児期医療の継承—小児がんのキャリアオーバー. 小児看護, 25(12), 1619-1622.
- 石本浩市(2002). 小児がんとその後—キャリアオーバーのフォローアップ. つばさ, 37, 3-9.
- 小林正夫, 松原紫(2002). 血液・腫瘍性疾患患児のレジリエンス—入院, 両親のかかわりおよび年齢による影響. 日本小児血液学会雑誌, 16, 129-134.
- 加来昌子, 藤川貞敏他(2002). 悪性腫瘍患者への心理的援助—臨床心理士の役割とは何か. 子どもの心とからだ, 10(2), 107-112.
- 野村佳代(2002). ハイリスク治療計画への意思決定における子どもの参加を巡る親の考え方—造血幹細胞移植事例を通して. 日本小児看護学会誌, 11(1), 8-14.
- 石本浩市(2002). 小児がんのトータルケア. 日本小児血液学会雑誌, 16(5), 284-289.
- 前田美穂(2002). 小児白血病の晩期障害. 小児科診療, 65(2), 309-314.
- 谷川弘治, 松浦和代他(2003). 小児慢性疾患キャリアオーバーの社会的自立に関する研究—小児がん先天性疾患, 小児期発症 1 型糖尿病専門医への調査結果から. 特別なニーズ教育とインテグレーション学会第 9 回研究大会発表要旨集録, 34-35.

- 石本浩市(2003). 小児がん「より良い闘病・より良い支援」—キャリアオーバーのフォローアップ. 育療, 27, 36-41.
- 杉本陽子, 宮崎つた子他(2003). 小児がん経験者の学校問題に関する医療と教育の連携. 小児がん, 40(2), 192-201.
- 上別府圭子(2003). 小児がんの子どもに見る PTSD—回復過程と予防的介入の試み. 児童青年精神医学とその近接領域, 44(1), 49-63.
- 小柳恵子, 伊藤公子他(2003). 小児がんの子どもの保護者の不安について. こども医療センター医学誌, 32(1), 5-13.
- 小澤美和(2003). 悪性疾患の心身医学. からだの科学, 231, 71-74.
- 小田滋(2003). <系統別疾患のキャリアオーバー>血液疾患—フォローアップ外来の重要性: 白血病を中心に. 治療, 85(9), 2521-2525.
- 丸光恵(2003). 子どもへのインフォームド・コンセント, 治療の選択における家族の意思決定—思春期にある小児がん患者のターミナルケア開始を中心に. 家族看護, 1(1), 85-96.
- 中西大介, 山田美和(2004). 小児科研修医・小児リエゾン医として関わった17歳青年男子悪性腫瘍の一例. 児童青年精神医学とその近接領域, 45(5), 27-34.
- 小澤美和, 細谷亮太(2004). 小児がん患者の精神腫瘍学. 臨床精神医学, 33(5), 597-600.
- 遠藤恵美子(2004). がん生存者の社会的適応. 臨床精神医学, 33(5), 647-653.
- 小澤美和(2004). 小児癌患者のストレス反応. 日本小児血液学会雑誌, 18(1), 10-16.
- 岡村仁(2004). がんの遺伝カウンセリング. 臨床精神医学, 33(5), 693-697.
- 渡邊雅子, 天野高生他(2004). 座談会: 当事者の私たちの思い. のぞみ, 132, 1-8.
- 戈木クレイグヒル滋子, 寺澤捷子他(2004). 闘病という名の長距離走—病名告知を受けた小児がんの子どもの闘病体験. 看護研究, 37(3), 69-85.
- 池田文子, 近江恵子(2004). 成人に達した小児がん経験者の活動について. 小児外科, 36(1), 139-142.
- 池田文子(2004). がんの子供を守る会と小児がん経験者の会の活動. がん看護, 9(3), 230-233.
- 石本浩市(2004). 成人になった小児がん患者. がん看護, 9(3), 226-229.
- 石田也寸志(2004). 長期フォローアップシステムの構築に向けて—グループスタディの立場から. 日本小児血液学会雑誌, 18(2), 91-96.
- 掛江直子, 恒松由記子(2004). 長期フォローアップシステムの構築と倫理的配慮. 日本小児血液学会雑誌, 18(2), 105-107.
- 石本浩市, 吉田輝子(2004). 長期フォローアップシステムの構築に向けて—長期フォローアップ外来の実際. 日本小児血液学会雑誌, 18(2), 108-111.
- 菱木知郎, 齊藤武他(2004). 小児がん経験者の長期フォローアップ. 小児外科, 39(10), 1241-1245.
- 前田美保(2004). 小児がん長期生存者の QOL. 日本小児血液学会雑誌, 18(5), 535-547.
- 渡辺美穂, 細谷京子(2004). 血液・腫瘍疾患をもつ子どもにとっての学童期の入院体験. 日本小児看護学会誌, 13(2), 33-39.
- 古谷佳由理(2004). 小児がん患者への病名告知と家族への支援. がん看護, 9(3), 199-202.
- 谷川弘治(2004). 小児がんの子どもの教育支援. がん看護, 9(3), 207-212.
- 前田貴彦, 杉本陽子他(2004). 長期入院を必要とする血液腫瘍疾患患児にとっての院内学級の意義—院内学級に在籍した患児・保護者の調査から. 小児保健研究, 63(3), 302-310.
- 堀部敬三(2004). 小児急性リンパ性白血病の治療成績. 小児外科, 36(1), 26-31.
- 花田良二(2004). 小児急性骨髄性白血病の治療成績. 小児外科, 36(1), 33-39.
- 別所文雄(2005). 白血病児のキャリアオーバー. 小児看護, 28(9), 1131-1135.
- 菊田敦(2005). 固形腫瘍児のキャリアオーバー. 小児看護, 28(9), 1136-1141.
- 中島昌徳, 麦島秀雄(2005). 造血幹細胞移植後の患者. 小児看護, 28(9), 1142-1144.
- 佐藤典子, 金井幸代他(2005). 小児がんキャリアオーバー患者の進路. 小児看護, 28(9), 1227-1232.
- 古谷佳由理(2005). 小児がんでキャリアオーバーした人の成育看護. 小児看護, 28(9), 1259-1262.
- 淵本佳奈, 森山美智子他(2005). 家族の患児に対する診断名の告知に関する研究. 小児看護, 28(7), 923-931.
- 上別府圭子(2005). 子ども時代の健康障害に関連した医療 PTSD とその予防的介入. 小児看護, 28(9), 1233-1239.
- 戈木クレイグヒル滋子, 中川薫他(2005). 小児がん専門医の子どもへの truth-telling に関する意識と実態—病名告知の状況. 小児がん, 43(1), 29-35.

- 梅田英子, 藤村真由美他(2005). 小児がんで入院中の子どもをもつ両親の心理状態とコーピングの特徴. 大阪大学看護学雑誌, 11(1), 11-17.
- 谷川弘治, 駒松仁子他(2005). 小児慢性疾患キャリアオーバーの社会的自立に関する研究—社会的自立意識の検討. 日本特殊教育学会第43回大会発表論文集, 176.
- 多賀陽子, 余谷暢之他(2005). 思春期の血液患者・悪性腫瘍の子どもたちに対する「医学部学生ベッドサイドボランティア活動」の役割. 小児がん, 42(1), 42-48.
- 宮城島恭子, 大見サキエ(2006). 思春期の小児がん患者の日常生活における自己決定の患児と母親の捉えかた. 小児がん看護, 1, 1-12.
- 松尾ひとみ(2006). 小児がん経験者(Survivors of Childhood Cancer)の発達の移行の検討. 看護研究, 39(3), 205-213.
- 恒松由記子, 堀川玲子他(2006). 小児がん患者の成人移行と長期フォローアップの諸問題. 小児科, 47(10), 1485-1498.
- 石田也寸志(2006). 北米 Childhood Cancer Survivor Study による小児がん経験者の長期的な問題点—第1編. 日本小児科学会雑誌, 110(11), 1513-1522.
- 石田也寸志(2006). 北米 Childhood Cancer Survivor Study による小児がん経験者の長期的な問題点—第2編. 日本小児科学会雑誌, 110(11), 1523-1533.
- 尾形明子, 鈴木伸一他(2006). 小児がん患者の学校不適応と母親の子どもの健康に関する認知. 小児がん, 43(2), 180-185.
- 堀浩樹(2006). 小児がんの子どもへの病気の説明. のぞみ, 146, 15-20.
- 野村佳代, 村田恵子(2006). 子どものハイリスク治療受け入れに向けた促しのための親の方略. 日本看護科学会誌, 26(2), 3-11.
- 石井佳世子(2007). 小児がんを克服し青年期を迎えた小児がん経験者の社会生活に対する母親の願いとかかわり. 日本小児看護学会誌, 16(2), 1-8.
- 岩瀬貴美子(2007). 外来通院している思春期小児がん患者の自己効力感と健康行動. 日本小児看護学会誌, 16(2), 33-40.
- 山下早苗, 城下智世他(2007). 小児がんと診断されてから現在までの家族関係の変化. 小児がん看護, 2, 40-48.
- 岩瀬貴美子(2007). 外来通院中にある思春期小児がん患者の自己効力感の特徴とそれを形成・変化させる生活体験. 小児がん看護, 2, 1-10.
- 大園秀一, 石田也寸志他(2007). 小児がん長期フォローアップ調査報告. 日本小児科学会雑誌, 111(11), 1392-1398.
- 石田也寸志(2007). 小児造血器腫瘍患者の長期生存例での問題点. 血液フロンティア, 17(2), 209-218.
- 上別府圭子(研究代表者)(2007). 小児がんサバイバーと家族における晩期障害の実態と学際的介入プログラム. 平成16年度～平成18年度科学研究費補助金(基礎研究B)研究報告書.
- 松林由恵, 戈木クレイグヒル滋子(2007). 小児がんの子どもへの医療面談. 日本保健医療行動学会年報, 22, 148-161.
- 戈木クレイグヒル滋子, 畑中めぐみ(2007). 医師と小児がんで入院した子どもとはじめての面談の場におけるやりとり. 小児がん, 44(2), 143-149.
- 神道那美, 浅野みどり(2007). 小児血液疾患患児の療養行動における自主性の現状—病状説明と親の関わりが及ぼす影響に焦点をあてて. 日本小児看護学会誌, 16(2), 9-16.
- 森浩美, 嶋田あすみ他(2008). 思春期に発症したがん患者の病気体験とその思い. 日本小児看護学会誌, 17(1), 9-15.
- 三善陽子, 太田秀明(2008). 小児がん長期フォローアップの現状. 小児外科, 40(6), 697-702.
- 小澤美和(2008). 小児がん治療後の精神・心理的サポート. 小児外科, 40(6), 703-707.
- 石田也寸志(2008). 小児がん治療後のよりよい生活—Erice宣言の重要性. 小児外科, 40(6), 708-712.
- 井上富美子(2008). 小児がん治療後の子どもたちとともに. 小児外科, 40(6), 713-717.
- 多和田奈津子(2008). 思春期の私, そしてがん. 思春期学, 26(1), 21-25.
- 泉真由子, 小澤美和他(2008). 小児がん患児の心理的側面—心的外傷後ストレス症状発症の予測因子の検討. 小児がん, 45(1), 13-18.
- 泉真由子, 小澤美和他(2008). 小児がん患児の両親の心理的側面—心的外傷後ストレス症状発症の予測因子の検討. 小児がん, 45(1), 19-23.
- 山下早苗(2008). 子どもが「がん」と診断されたら. 小児がん, 31(11), 1491-1497.
- 多和田奈津子(2008). 小児がん経験者の知られざる悩み. 小児看護, 31(11), 1532-1535.

- 鷹田佳典(2008). 「診断過程」における親の経験—小児がん患者家族への聞き取り調査から. 法政大学大学院紀要, 60, 155-172.
- 石田也寸志(2008). 小児がん経験者の長期フォローアップ. 日本小児血液学会雑誌, 22(3), 144-155.
- 丸光恵(2008). 思春期・青年期のがん患者の家族への看護. 家族看護, 6(2), 65-74.
- 沖奈津子(2008). 白血病維持療法中の学童・思春期の患者が疾患をもちながら生活する姿勢. 千葉看護学会誌, 14(1), 71-79.

VI. 腎疾患

- 浅井昌弘(1973). 人工透析患者の精神医学的諸問題. 精神医学, 15(1), 4-15.
- 青木繁一(1976). 小児透析の精神医学的理解—親との関連において. 腎と透析, 1(3), 223-227.
- 佐藤喜一郎(1978). 腎移植後の精神医学的諸問題. 精神神経学雑誌, 80(2), 65-83.
- 北川照男(1979). 腎不全に基づく在宅心身障害児の調査報告—わが国の腎不全の実態. 小児保健研究, 38(2), 143-151.
- 山口正司(1980). 小児期に発症し成人まで持続する腎疾患—とくに慢性腎炎について. 小児内科, 12(3), 83-89.
- 酒井紀, 北島武之他(1981). 内科の立場からみた思春期の疾患—特に腎疾患を中心に. 小児科診療, 44(1), 49-53.
- 春木繁一(1983). 透析患者の心理的側面. 看護MOOK, 4, 128-133.
- 高木俊一郎(1983). 腎疾患患児とその母親の心理. 小児の精神と神経, 58(12), 137-143.
- 佐藤喜一郎(1984). 慢性透析患者と腎移植患者の精神医学的問題. 三浦貞則編, リエゾン精神医学, 85-91, 医歯薬出版, 東京.
- 伊藤克己, 永田道子他(1985). 透析療法を受けている小児・家族への精神的ケア. 小児看護, 8(5), 600-606.
- 伊藤克己(1985). 本邦における透析患者の現況. 小児腎不全研究会誌, 5, 212-217.
- 安村忠樹, 鈴木克好, 高田恒郎, 星野雅代, 春木繁一他(1986). パネルディスカッション: 小児腎不全患者の社会復帰の現況(1~5). 小児腎不全研究会誌, 6, 41-62.
- 福西勇夫, 久郷敏明他(1988). 人工透析患者の心理学的側面. 心身医学, 28(7), 602-607.
- 正木治恵(1988). 青年期透析患者の自立を促す看護に関する研究. 日本看護科学会誌, 8(2), 2-16.
- 伊藤克己, 甲能深雪他(1988). 小児期末期腎不全治療における腎移植の身体的, 精神的発達におよぼす影響. 透析学会誌, 21(7), 665-671.
- 岡隆弘, 安村忠樹他(1988). 腎移植後の長期予後と社会復帰の現況. 透析学会誌, 21(7), 665-671.
- 宇田川順子(1989). 小児期IgA腎症の成人期へのキャリアオーバーについて. 日本小児科学会雑誌, 93(1), 159.
- 村上睦美(1989). 小児腎炎・ネフローゼの成人へのキャリアオーバー—学校検尿発見腎炎例を中心に. 日本腎臓病学会, 31(12), 1238-1239.
- 広瀬栄子, 横山京子他(1989). 思春期の末期腎不全患者及び腎移植後患者が持つ諸問題の検討(その1). 小児腎不全研究会誌, 9, 115-117.
- 横山京子, 広瀬栄子他(1989). 思春期の末期腎不全患者及び腎移植後患者が持つ諸問題の検討(その2). 小児腎不全研究会誌, 9, 118-120.
- 本田雅敬, 横山京子他(1989). 小児末期腎不全患者の心理的諸問題. 臨床透析, 5(10), 1619-1626.
- 河西紀昭, 北条みどり他(1990). 小児腎疾患の成人へのキャリアオーバー. 小児医学, 23(6), 927-938.
- 佐藤喜一郎, 赤星恵子他(1990). 小児・青年期の生体腎移植の精神医学的問題. 児童青年精神医学とその近接領域, 31(5), 1-24.
- 正木治恵, 野口美和子他(1990). 慢性血液透析患者の透析ストレスとコーピング行動について. 千葉大学看護学部紀要, 12, 21-30.
- 福西勇夫(1991). 人工透析患者への家族を含めた心身医学的接近—透析の自己管理と失感情症の関連より. 心身医学, 28(7), 110-115.
- 福西勇夫(1992). 腎不全患者の心理・社会的問題—リエゾン精神医学の立場から. 腎移植・血管外科, 4(2), 161-165.
- 佐藤喜一郎(1992). 腎移植と精神医学的諸問題. 腎と透析, 32(1), 59-63.
- 安村忠樹, 岡隆宏(1992). 腎移植後の社会復帰. 腎と透析, 32(1), 75-79.
- 福西勇夫(1992). 臓器移植後の心身医学的諸問題. 心身医学, 32(8), 638-644.

- 佐藤喜一郎, 吉田芳子他(1992). 腎移植後の精神医学的問題とその予防. 心身医学, 32(8), 646-652.
- 佐藤喜一郎(1992). 臓器移植の精神医学的諸問題. 精神治療学, 7(4), 337-346.
- 小川修, 川村猛他(1992). 腎移植後小児の社会復帰とその問題点. 腎移植・血管外科, 4(2), 139-146.
- 村上睦美(1993). 小児から成人へキャリアオーバーする IgA 腎症. 現代医療, 25, 471-476.
- 伊藤拓(1993). 慢性疾患児のトータルケア—腎炎・ネフローゼ症候群. 障害者問題研究, 21(2), 143-150.
- 木村和正, 石川敏男他(1993). 透析患者の心理的適応. 心身医学, 33(7), 586-591.
- 中島光恵, 皆川美紀他(1994). 慢性腎疾患児の療養行動, ストレス, ソーシャルサポート—外来児と入院児の比較. 千葉大学看護学部紀要, 16, 61-68.
- 下田益弘, 飯高喜久雄他(1994). コンプライアンスの維持が重要と思われた IgA 腎症キャリアオーバーの 1 例. 小児腎不全研究会誌, 14, 45-47.
- 佐藤喜一郎(1994). 生体腎移植の光と影. 子どもの心とからだ, 3(1, 2), 12-18.
- 丸光恵, 早川香他(1995). 慢性腎疾患児の療養生活に関する知識と受け止め方について—退院直前の患児で母親の調査より. 千葉大学看護学部紀要, 17, 111-114.
- 五十嵐隆(1995). <小児から内科へのキャリアオーバー診療>慢性腎疾患のフォローアップ. medicina, 32(2), 302-304.
- 二宮啓子(1995). 腎疾患児の外泊中の生活に関する研究—入院中と外泊中の運動量の比較. 日本看護学会誌, 14(1), 30-39.
- 伊藤克己, 川口洋(1995). 総論—小児慢性腎不全の最近の動向. 腎と透析, 38(6), 769-774.
- 春木繁一(1995). 腎不全患児の精神療法. 腎と透析, 38(6), 869-874.
- 早川広史, 富沢修一他(1996). 小児期ネフローゼ症候群患者の長期予後—成人期キャリアオーバーについて. 日本小児科学会雑誌, 100(2), 424.
- 清保博, 多田勝他(1996). 小児 IgA 腎症の腎不全・腎死を規制する因子と, 成人期へのキャリアオーバーの問題点. 日本小児腎臓病学会雑誌, 9(2), 145-152.
- 佐藤喜一郎(1996). 行動化を繰り返した透析療法中の青年期の患者. 臨床透析, 12(9), 1263-1269.
- 中塚博勝(1996). 慢性疾患児の精神衛生に関する研究. 育療, 25-38.
- 春木繁一(1996). 腎移植患者の精神—看護の立場から. 透析ケア, 冬季増刊号, 186-201.
- 林優子(1996). 腎移植後のレシピエントの QOL に関する対処および対処に影響を及ぼす要因に関する基礎調査. 岡山大学医療技術短期大学部紀要, 7, 49-57.
- 木内亜矢子(1996). 元気に成長できたことへの感謝. 育療, 3, 53-54.
- 春木繁一(1997). 腎移植後の精神医学的アプローチ. 小児看護, 20(6), 756-760.
- 樋口恵美, 伊藤雄平(1997). ネフローゼ症候群の合併症とその対策—心理的問題. 小児内科, 29(11), 1590-1593.
- 吉矢邦彦, 飯島一誠他(1997). 腎移植術後の長期管理. 小児看護, 20(6), 750-755.
- 野嶋佐由美, 梶本市子他(1997). 血液透析患者の自己決定の構造. 日本看護科学会誌, 17(1), 22-31.
- 内山聖(1998). 小児慢性腎疾患のキャリアオーバー. 小児科診療, 61(6), 1085-1089.
- 丸光恵, 田中千代他(1998). 青年期慢性腎疾患児の喫煙・飲酒に関する実態とその関連要因に関する研究. 千葉大学看護学部紀要, 20, 49-57.
- 水野愛子(1998). 若年で透析導入された末期腎不全症例の長期予後と QOL. 日本小児腎臓病学会雑誌, 11(1), 97-102.
- 保科英子, 林優子他(1998). 腎移植を受けたレシピエントの QOL 構成要素. 第 29 回日本看護学会論文集(成人看護), 99-101.
- 保科英子, 林優子他(1998). 腎移植を受けたレシピエントの QOL 構成要素とレシピエント属性との関係. 岡山大学医療技術短期大学部紀要, 9, 9-14.
- 倉山英昭(1998). 小児慢性腎疾患児の生活管理. 育療, 11, 16-23.
- 相馬啓子, 老久保和雄(1999). 社会復帰を果たした慢性透析患者の喜びと悩み・ストレス—わたしにとっての社会復帰の意義. 臨床透析, 15(5), 615-617.
- 菅原文明(1999). 社会復帰を果たした慢性透析患者の喜びと悩み・ストレス—就労の喜びと悩み. 臨床透析, 15(5), 617-619.
- 星井桜子(1999). 社会復帰を果たした慢性透析患者の喜びと悩み・ストレス—小児腎不全患者の社会復帰を促進させるために. 臨床透析, 15(5), 619-621.

- 菅原剛太郎(1999). 社会復帰を果たした慢性透析患者の喜びと悩み・ストレス—長期透析患者の就労をめざして. 臨床透析, 15(5), 621-624.
- 成田悦雄(1999). 腎炎・ネフローゼ児の教育. 育療, 14, 36-41.
- 藤田富紀子(1999). 家族で歩む道. 育療, 14, 42-43.
- 渡邊久美, 林優子他(1999). 腎移植後に人生の受け止め方が低下した3事例の分析. 岡山大学医学部保健学科紀要, 10, 51-56.
- 吉川徳茂, 伊藤拓(2000). <小児期から成人, そして次世代へ>腎疾患—IgA腎症. 小児内科, 32(12), 2152-2156.
- 宮本茂子, 坂井瑠実(2000). 結婚・出産を希望する透析患者. 臨床透析, 16(10), 1611-1617.
- 平林優子(2001). ネフローゼ症候群の慢性期における看護ケアのポイント. 小児看護, 24(11), 1556-1562.
- 中野綾美(2001). ネフローゼ症候群の子どもと共に生きる家族のエンパワーメント. 小児看護, 24(11), 1563-1568.
- 天野里奈, 吉矢邦彦他(2001). 小児への生体腎提供者の健康関連QOL—SF-36による評価. 小児保健研究, 60(3), 427-431.
- 村上睦美(2001). <成人に達した小児疾患患児・者のケア>慢性腎炎. 保健の科学, 43(11), 852-857.
- 春木繁一(2001). 思春期腎移植レシピエントをめぐる心理的困難. こども医療センター医学誌, 30(2), 77-88.
- 林優子, 中西代志子他(2001). 腎移植を受けたレシピエントの背景とQOL. 岡山大学医学部保健学科紀要, 12, 37-44.
- 早川広史, 藤中秀彦他(2002). 小児腎疾患におけるキャリーオーバーの経過観察について. 日本小児科学会雑誌, 106(1), 99.
- 西本智恵(2002). 慢性腎疾患患児の疾患受容に関する一考察. 子どもの心とからだ, 10(2), 113-118.
- 丸光恵(2002). 10代の小児慢性腎疾患患者の問題. 育療, 25, 15-20.
- 江藤節代, 二重作清子(2002). 慢性腎疾患をかかえて生活する思春期の子どもの病気体験—面接調査による回想から. 第33回日本看護学会論文集(小児看護), 33-35.
- 平賀健太郎, 小林正夫(2002). 慢性腎疾患のストレス—への評価—ネフローゼ症候群と慢性腎炎の比較. 小児保健研究, 61(6), 799-805.
- 白髪弘司(2002). 小児期, 思春期, 青年期のレシピエントにみる精神心理学的問題. 腎と透析, 53(6), 755-759.
- 高橋昌里, 原田研介他(2002). 第105回日本小児科学会学術集会シンポジウム1:小児慢性疾患の長期経過とケア—成育医療の視点から, 慢性腎疾患の長期予後. 日本小児科学会雑誌, 106(11), 1578-1582.
- 佐藤喜一郎(2002). 小児期における臓器移植と発達に及ぼす影響・精神医学的問題. 小児看護, 25(12), 1585-1599.
- 大橋信子(2002). 腎移植医療において看護師が味わう精神倫理的問題. 腎と透析, 53(6), 761-764.
- 白髪宏司(2002). 日本の小児期腎不全管理—腎移植に至るアプローチとその問題点. 泌尿器外科, 15(5), 563-567.
- 服部新三郎, 吉岡加寿美他(2002). 日本における小児期末期腎不全の現況. 小児科, 43(1), 57-64.
- 富沢修一, 早川広史(2002). 小児慢性腎疾患患児のQOL. 小児科, 43(4), 434-440.
- 穴戸清一郎, 高田雅恵(2002). 小児腎移植後の患児・家族のQOL. 小児科, 43(4), 450-456.
- 岡田謙(2002). 腎炎, ネフローゼの時期—親の心理について. 腎と透析, 53(6), 707-710.
- 太田和夫(2002). わが国の腎移植と透析療法. 今日の移植, 15(1), 13-20.
- 岡茂, 生川善雄(2002). 人工透析者の生き方・価値観の構造をとらえる一つの試み—生活行動範囲との関連において. 社会福祉学, 43(1), 176-186.
- 江藤節代, 二重作清子(2003). 思春期の慢性腎疾患患児の自己決定に関する研究. 日本腎不全看護学会誌, 5(2), 52-57.
- 五十嵐隆(2003). <系統別疾患のキャリーオーバー>腎疾患. 治療, 85(9), 2515-2520.
- 星井桜子(2003). <系統別疾患のキャリーオーバー>腎疾患キャリーオーバー患者の紹介システム. 治療, 85(9), 2585-2589.
- シェリフ多田野亮子, 大田明英(2003). 血液透析患者の心理的適応(透析受容)に影響を与える要因について. 日本看護科学会誌, 23(1), 1-13.
- 奥原博子, 中村知史他(2003). 腎移植の看護を考える—生体腎移植と献腎移植の事例を経験して. 信州大学医学部附属病院看護研究集録, 31(1), 21-25.
- 長佳代(2003). 子ども時代に移植を受けた患者さんへのインタビューから浮かび上がったこと. 育療, 29, 26-31.
- 加茂登志子(2004). <疾患と子どもの心>腎臓病. 小児科臨床, 578(増刊号), 1423-1428.
- 江藤節代, 松永千絵他(2004). 思春期の慢性腎疾患の親の体験に関する研究. 家族看護学研究, 10(1), 32-38.

- 白髪宏司(2005). 慢性腎疾患. 小児看護, 28(9), 1163-1167.
- 丸光恵(2005). 慢性腎疾患でキャリアオーバーした人の成育看護. 小児看護, 28(9), 1268-1274.
- 小坂橋靖, 生駒雅昭(2005). 小児腎疾患のキャリアオーバー・クロスオーバーとその対策. *Nephrology Frontier*, 4(1), 22-28.
- 長佳代(2005). 小児腎移植後患者の思春期における療養行動の変化と関連する条件. 日本看護科学会誌, 25(2), 3-11.
- 長佳代(2005). 小児腎不全患者の良好な社会復帰への援助. 臨床透析, 21(10), 1389-1396.
- 大木聡子(2005). 透析を受けるキャリアオーバーした人の成育看護. 小児看護, 28(9), 1281-1285.
- 服部元史(2006). <小児から成人へのキャリアオーバー>腎疾患—特に慢性腎不全. 47(10), 1516-1525.
- 中島法美, 水内恵子他(2007). 末期腎不全とクローン病を抱える青年期の患者のストレスコーピング—病みの軌跡モデルを用いて. 透析ケア, 13(4), 410-415.
- 後藤義光, 永井琢人(2007). 怠薬が原因で腎機能低下を来していると思われる青年期腎移植例. 日本小児腎不全学会雑誌, 27, 140-141.
- 齊藤陽, 小坂橋靖(2007). 小児腎疾患のキャリアオーバー. *Annual Review 腎臓*, 83-88.
- 瀧正史(2007). 小児科から内科, 泌尿器科へのキャリアオーバー. 日本医師会雑誌, 136(特別2), 140-141.
- 齊藤陽, 小坂橋靖(2007). 小児におけるCKD—小児腎疾患のキャリアオーバー. 臨床と研究, 84(11), 1483-1487.
- 渡部千世子(2007). 慢性腎疾患青年における病気の理解の様相—VASTを使用した調査から. 育療, 37, 27-31.
- 井上由起子(2008). キャリアオーバーしたネフローゼ症候群患者のステロイド治療に伴う体験. 小児保健研究, 67(2), 322-330.

Ⅶ. 先天性心疾患

- 安藤正彦, 高尾良他(1986). 心疾患のトータルケア. 小児科診療, 61(9), 1503-1508.
- 中島町子, 唐原優他(1991). 大学生の先天性心疾患の現況について. 全国大学保健管理研究集会 28 回報告書, 236-239.
- 五十嵐勝朗, 黒沼忠由樹他(1994). 重症先天性心臓病患者の職場参加への支援—QOL を高めるために. 小児科, 35(11), 1405-1407.
- 小池一行(1995). <小児から内科へのキャリアオーバー診療>先天性心疾患. *medicina*, 32(2), 289-291.
- 益守かづき(1997). 先天性心疾患の子どもの体験に関する研究—民族看護学の研究方法を用いて. 看護研究, 30(3), 233-244.
- 小川實(1997). 思春期における慢性疾患の管理—先天性心疾患. 小児内科, 29(5), 647-650.
- 手島秀剛, 中澤淳他(1997). 先天性心疾患成人の社会生活における問題. 心臓, 29(4), 303-310.
- 木村千恵子, 日沼千尋他(1998). 先天性心疾患患児への手術の説明(第1報) 一家庭内で患児に行われている説明内容とそれに影響する要因. 東京女子医科大学看護学部紀要, 1, 53-60.
- 日沼千尋, 阿部須麻子他(1998). 先天性心疾患患児への手術の説明(第2報) —パンフレットの郵送の試み. 東京女子医科大学看護学部紀要, 1, 61-68.
- 門間和夫(1998). 先天性心疾患のキャリアオーバー. 小児科診療, 61(6), 1071-1077.
- 松裏裕行, 佐地勉(1998). <外来での慢性疾患患児の管理>心疾患. 小児科臨床, 51(増刊), 1465-1474.
- 小川實(1998). 専門性をいかした外来—小児慢性心疾患. 小児科診療, 61(11), 2025-2028.
- 赤木禎治, 加藤裕久(1999). 先天性心疾患の妊娠. *Heart View*, 3(7), 750-754.
- 中澤誠, 太田真弓他(1999). 年長小児・思春期の心疾患への対処の仕方. 小児内科, 31(6), 819-825.
- 柳川幸(2000). <小児期から成人, そして次世代へ>先天性心疾患. 小児内科, 32(12), 2113-2117.
- 赤木禎治, 丹羽公一郎他(2001). 成人先天性心疾患診療における小児循環器医の役割. 日本小児科学会雑誌, 105(9), 954-963.
- 丹羽公一郎(2001). 成人先天性心疾患. 小児内科, 33(5), 616-621.
- 百々秀心, 石沢瞭(2001). 先天性心疾患とQOL. 小児内科, 33(5), 644-649.
- 柳川幸重(2001). 変貌しつつある小児循環器病学. 小児内科, 33(5), 597-598.
- 赤木美智男(2001). 先天性心疾患. 保健の科学, 43(11), 837-841.
- 松岡留美子(2001). 先天性心疾患の遺伝カウンセリング. 小児内科, 33(5), 633-639.

- 丹羽公一郎, 立野滋(2002). 欧米における成人先天性心疾患診療専門施設の運営実態と今後の日本の方向性. *Journal of Cardiol*, 39(4), 227-232.
- 丹羽公一郎, 立野滋他(2002). 成人期先天性心疾患の社会的自立と問題点. *Journal of Cardiol*, 39(5), 259-266.
- 石澤瞭, 百々秀心他(2002). 第105回日本小児科学会学術集会シンポジウム1: 小児慢性疾患の長期経過とケア; 成育医療の視点から—成人先天性心疾患患者診療の現状と問題点. *日本小児科学会雑誌*, 106(2), 145.
- 上田礼子, 石橋朝紀子(2002). 慢性疾患児の Resilience に関する測定尺度の検討—先天性心疾患児を中心に. *小児科臨床*, 55(10), 1985-1991.
- 水元淑恵, 赤木禎治(2002). 成人先天性心疾患患者の妊娠と出産. *小児科*, 43(5), 633-640.
- 高橋清子(2003). 先天性心疾患をもつ思春期の子どもたちの‘病気である自分’に対する思い. *大阪大学看護学雑誌*, 8(1), 12-19.
- 仁尾かおり, 藤原千恵子(2003). 先天性心疾患をもつ思春期の子どもたちのコーピング. 第34回日本看護学会論文集(小児看護), 65-67.
- 仁尾かおり, 藤原千恵子(2003). 先天性心疾患をもつ思春期の子どもたちの病気認知. *小児保健研究*, 62(5), 544-551.
- 姫野和歌子, 赤木禎治(2003). <思春期慢性疾患への対応>先天性心疾患. *小児科*, 44(10), 1482-1488.
- 坂崎尚徳, 鈴木嗣敏他(2003). 成人先天性心疾患の社会的自立の実際. *小児科診療*, 66(7), 1195-1199.
- 丹羽公一郎, 相羽純(2003). 社会的自立と問題点—自立を妨げる要因, 前置き. *日本小児循環器学会雑誌*, 19(2), 67-68.
- 赤木禎治, 日高淑恵他(2003). 成人先天性心疾患患者の社会的自立の現況と問題点—自立を妨げる要因; 結婚と妊娠(男女の違い). *日本小児循環器学会雑誌*, 19(2), 72-74.
- 丹羽公一郎, 立野滋他(2003). 成人先天性心疾患患者の社会的自立と教育, 保険, 社会保障体系. *日本小児循環器学会雑誌*, 19(2), 69-71.
- 百々秀心(2003). 医療サイドの患者自身の自立を妨げる要因とその対策—特に妊娠・出産に関して. *日本小児循環器学会雑誌*, 19(2), 74-76.
- 坂崎尚徳, 榎野征一郎(2003). チアノーゼ性心疾患心内修復術後成人先天性心疾患患者の就業. *日本小児循環器学会雑誌*, 19(2), 76-78.
- 唐澤賢祐, 原田研介(2003). 学校検診と循環器疾患. *小児科臨床*, 56(8), 1637-1645.
- 松裏裕行, 佐治勉(2003). <系統別疾患のキャリアオーバー>循環器疾患. *治療*, 85(9), 2506-2510.
- 仁尾かおり, 駒松仁子他(2004). 先天性心疾患をもつ思春期・青年期の患者に関する文献の概観. *国立看護大学校研究紀要*, 3(1), 11-19.
- 青木雅子(2004). 先天性心疾患の子どもたちのボディイメージ手術を終えて社会で生活する青年たちの語りから. *日本小児看護学会第14回学術集会講演集*, 98-99.
- 仁尾かおり, 藤原千恵子(2004). 先天性心疾患をもつ思春期の子どもたちの母親の思いと配慮. *日本小児看護学会誌*, 13(2), 26-32.
- 塚野真也(2005). 先天性心疾患. *小児看護*, 28(9), 1119-1125.
- 仁尾かおり(2005). 先天性心疾患をもちキャリアオーバーする人の成育看護. *小児看護*, 28(9), 1249-1253.
- 小山田文子(2005). 先天性心疾患とともに歩んで. *小児看護*, 28(9), 1308-1310.
- 伊庭久江(2005). 先天性心疾患をもつ幼児・学童の‘自分の疾患のとらえかた’. *千葉看護学会会誌*, 11(1), 38-45.
- 姫野和歌子, 赤木禎治他(2005). 肺高血圧のために手術不能と判断された先天性心疾患—成人期の問題と管理. *日本小児循環器学会雑誌*, 21(1), 2-7.
- 石澤瞭(2006). <小児から成人へのキャリアオーバー>成人先天性心疾患. *小児科*, 47(10), 1437-1446.
- 仁尾かおり(2006). 先天性心疾患をもちキャリアオーバーする高校生の病気認知. *小児保健研究*, 65(5), 658-665.
- 服部元史(2006). <小児から成人へのキャリアオーバー>腎疾患—特に慢性腎不全. *小児科*, 47(10), 1516-1525.
- 仁尾かおり, 藤原千恵子(2006). 先天性心疾患をもつ思春期にある人のレジリエンスの特徴. *日本小児看護学会誌*, 15(2), 22-29.
- 仁尾かおり(2008). 先天性心疾患をもちキャリアオーバーする中学生・高校生の病気認知の構造と背景要因による差異. *日本小児看護学会誌*, 17(1), 1-19.
- 古尾谷侑奈, 仁尾かおり(2008). 先天性心疾患をもつ青年期の女性の就職・就労に対する思い. *国立病院看護研究学会*

誌, 4(1), 11-19.

石河真紀(2008). 思春期にある先天性心疾患患児の自己開示と自尊感情およびソーシャルサポートの関連. 日本小児看護学会誌, 17(2), 1-8.

仁尾かおり(2008). 先天性心疾患をもち成長する子どものライフステージに沿った支援. 小児看護, 31(12), 1639-1645.

宮田純, 仁尾かおり(2008). 先天性心疾患をもちキャリアオーバーした女性の結婚・妊娠・出産に対する思い. 小児看護, 31(12), 1674-1679.

服部元史(2008). 小児腎移植の長期成績と問題点. 小児科, 49(13), 1975-1982.

全国心臓病の子どもを守る会『心臓をまもる会』編集委員会(2008). 先天性心疾患をもつ子どもと患者, 家族からのメッセージ. 小児看護, 31(12), 1681-1686.

仁尾かおり(2008). 先天性心疾患をもって成長する中学生・高校生のレジリエンス(第1報) —背景要因によるレジリエンスの差異. 小児保健研究, 67(6), 826-833.

仁尾かおり(2008). 先天性心疾患をもって成長する中学生・高校生のレジリエンス(第2報) —病気認知によるレジリエンスの差異. 小児保健研究, 67(6), 834-839.

Ⅷ. 川崎病 (心臓後遺症)

白石裕比湖(1995). <小児から内科へのキャリアオーバー診療>川崎病冠動脈瘤. *medicina*, 32(2), 292-295.

石井正浩, 衛藤元寿他(1997). 思春期における慢性疾患の管理—後天性心疾患. 小児内科, 29(5), 650-659.

太田八千雄(2001). 川崎病既往患者の長期経過観察と内科への移行—北海道および全国アンケート調査結果から. 小児科診療, 64(8), 1211-1217.

菅原洋子(2005). 川崎病. 小児看護, 28(9), 1126-1130.

藪部友良, 土屋恵司他(2006). 川崎病既往成人への対応. 小児科, 47(10), 1447-1454.

加藤裕久(2006). 川崎病: 成人領域の問題点, その1: 企画スタートにあたって—成人になった川崎病の問題点. 川崎病の子供をもつ親の会・会報やまびこ通信, 141, 2-6.

小川俊一(2006). 川崎病: 成人領域の問題点, その2: 川崎病と向き合うために—川崎病の心血管後遺症に対する内科的, 外科的治療の現状. 川崎病の子供をもつ親の会・会報やまびこ通信, 142, 2-7.

篠原徹(2006). 川崎病: 成人領域の問題点, その3: 川崎病と向き合うために—怠薬, ドロップアウト防止のために. 川崎病の子供をもつ親の会・会報やまびこ通信, 143, 2-6.

津田悦子(2006). 川崎病: 成人領域の問題点, その4: 川崎病と出産—川崎病による冠動脈障害をもつ患者の妊娠・分娩について. 川崎病の子供をもつ親の会・会報やまびこ通信, 144, 2-4.

西村恵子(2006). 川崎病: 成人領域の問題点, その5: 川崎病と私—「新しい命」. 川崎病の子供をもつ親の会・会報やまびこ通信, 145, 11-12.

濱岡健城(2006). 川崎病: 成人領域の問題点, その6: 川崎病と動脈硬化—川崎病は早発動脈硬化の危険因子となるか. 川崎病の子供をもつ親の会・会報やまびこ通信, 146, 2-8.

橋爪功明(2006). 川崎病: 成人領域の問題点, その7: 川崎病と身体障害者手帳. 川崎病の子供をもつ親の会・会報やまびこ通信, 147, 2-8.

川崎病の子供をもつ親の会(2007). 罹患した本人(16歳以上)へのアンケート調査—その②. やまびこ通信, 148, 6-9.

川崎病の子供をもつ親の会(2007). 罹患した本人(16歳以上)へのアンケート調査—その③. やまびこ通信, 149, 10-11.

御厨晶子, 宮澤佳子(2008). 川崎病慢性期看護ケアの実際—キャリアオーバーする川崎病患者・家族の看護. 小児看護, 31(3), 326-333.

浅井満(2008). 川崎病の子供をもつ親の会の活動. 小児看護, 31(3), 342-348.

Ⅸ. 免疫疾患

大国真彦(1985). 小児膠原病の成人への移行. 小児内科, 17(4), 481-484.

武井修二, 今中啓之他(1990). 若年性関節リウマチの経過と予後に関する研究—予後と risk factor の検討. 日本小児科学会雑誌, 94(11), 2342-2350.

- 矢田純一(1995). <小児から内科へのキャリアオーバー診療>免疫不全症候群. *medicina*, 32(2), 318-319.
- 田中信介(1995). <小児から内科へのキャリアオーバー診療>膠原病. *medicina*, 32(2), 331-333.
- 伊藤保彦, 福永慶隆(1999). 長期経過からみた自己免疫疾患の問題点—全身性エリテマトーデス. *小児内科*, 31(11), 1573-1576.
- 今中啓之, 鉦之原昌(1999). 長期経過からみた自己免疫疾患の問題点—若年性関節リウマチ. *小児内科*, 31(11), 1577-1580.
- 立澤幸(1999). 長期経過からみた自己免疫疾患の問題点—皮膚筋炎. *小児内科*, 31(11), 1581-1584.
- 横田俊平(2000). <小児期から成人, そして次世代へ>リウマチ・膠原病. *小児内科*, 32(12), 2138-2142.
- 崎山幸夫(2000). <小児期から成人, そして次世代へ>原発性免疫不全症. *小児内科*, 32(12), 2149-2151.
- 横田俊平(2001). 小児膠原病全国調査を終えて. *小児内科*, 33(6), 753-754.
- 相原雄幸(2001). 小児リウマチ疾患の長期管理と病状の変容. *小児内科*, 33(6), 760-764.
- 松山毅(2001). 若年性関節リウマチ—社会的・心理的サポート. *小児内科*, 33(6), 801-805.
- 稲毛康司(2001). 小児慢性関節炎患者の教育—思春期患者教育, 患者指導のワークブックなど. *小児内科*, 33(6), 839-844.
- 阿部香織(2001). リウマチ性疾患専門内科医からみた成人に達した JRA, SLE の引き継ぎのされ方. *小児内科*, 33(6), 845-848.
- 稲毛康司(2001). 小児期に発症した小児リウマチ性疾患のキャリアオーバー, 小児科から内科へ. *Prog Med*, 21, 874-877.
- 村上正人(2001). 小児リウマチ性疾患患児の精神・心理的サポート. *小児内科*, 33(6), 849-852.
- 藤川敏(2001). 小児リウマチ性疾患の疫学. *小児内科*, 33(6), 755-759.
- 相原雄幸(2001). 小児リウマチ性疾患の長期管理と病状の変容. *小児内科*, 33(6), 760-764.
- 渡辺言夫(2001). 膠原病. *保健の科学*, 43(11), 848-851.
- 鉦之原昌(2001). リウマチと生涯医療. *臨床リウマチ*, 13, 1-2.
- 今中啓之, 武井修治他(2001). JRA のキャリアオーバー—病態・治療・予後. *リウマチ*, 41(2), 316.
- 和田靖之(2001). 若年性関節リウマチ—日常生活の実際. *小児内科*, 33(6), 797-800.
- 島田廣子(2001). 若年性関節リウマチ—社会活動への参加. *小児内科*, 33(6), 811-814.
- 富板美奈子(2001). 全身性エリテマトーデス—日常生活の実際. *小児内科*, 33(6), 832-834.
- 金兼弘和(2002). 第 105 回日本小児科学会学術集会シンポジウム 1: 小児慢性疾患の長期経過とケア—成育医療の視点から, 免疫疾患. *日本小児科学会雑誌*, 106(11), 1589-1593.
- 伊藤繁(2002). 原発性免疫不全症候群. *保健の科学*, 44(4), 266-269.
- 松山毅(2003). 難治性 JIA 患児の心とケア. *リウマチ科*, 30(6), 531-537.
- 伊藤保彦, 五十嵐徹他(2003). 膠原病. *小児科*, 44(10), 1489-1496.
- 稲毛康司(2004). 若年性関節リウマチ(小児慢性関節炎)のキャリアオーバーへの対応—Adult JRA(JIA)への対応. *小児看護*, 27(8), 999-1006.
- 福田和明(2005). 全身性エリテマトーデス女性患者の他者との関係性における体験. *日本看護科学会誌*, 25(2), 56-64.
- 武井修治(2005). 小児リウマチ性疾患. *小児看護*, 28(9), 1177-1182.
- 野中由希子, 武井修治他(2005). 小児膠原病における難治例対策の現状と今後の展望. *小児科*, 46(1), 111-117.
- 今中啓之(2005). 膠原病患者の心理的・社会的サポート. *小児科診療*, 68(4), 731-736.
- 岩田力(2005). 原発性免疫不全症候群. *小児看護*, 28(9), 1183-1191.
- 横田俊平(2005). 全身性エリテマトーデスの考え方と治療法の進歩. *日本小児科学会雑誌*, 109(4), 459-467.

X. 気管支喘息

- 仲井美由紀(1994). 気管支喘息児の自己管理における認識にかかわる要因—学童後期から思春期前期の子どもたちとその家族との面接調査から. *岐阜大学医療技術短期大学紀要*, 1, 96-108.
- 勝呂宏(1995). <小児から内科へのキャリアオーバー診療>気管支喘息. *medicina*, 32(2), 306-308.
- 北栄子(1998). 小・中学校における喘息児の対応の現状と課題. *育療*, 12, 35-37.

- 玉田美希子(1998). 喘息と私. 育療, 11, 36-38.
- 小田嶋博(2000). 思春期気管支喘息についての現在の考え方—小児科から. アレルギー, 49(6), 459-462.
- 小田嶋博(2000). 思春期喘息. アレルギー科, 9(6), 554-559.
- 小田嶋博(2000). 小児～思春期喘息よりの検討. アレルギーの臨床, 20(5), 374-379.
- 駒瀬裕子, 中川武正(2000). 思春期喘息の問題点とその対策—特に内科に移行する際の注意点. アレルギーの臨床, 20(12), 939-945.
- 岩田力(2000). <小児期から成人, そして次世代へ>アレルギー疾患—アトピー性皮膚炎, 気管支喘息. 小児内科, 32(12), 2123-2128.
- 早川浩(2002). 小児気管支喘息. 保健の科学, 44(4), 275-279.
- 山田政功(2002). 小児期・思春期のストレスと気管支喘息. ストレスと臨床, 14, 24-27.
- 小田嶋博(2005). 思春期喘息. 日本小児科学会雑誌, 109(4), 468-477.
- 荒井康男, 荒井清美(2005). 気管支喘息. 小児看護, 28(9), 1168-1171.
- 赤坂徹(2006). 思春期喘息の問題点. 小児科臨床, 59(増刊号), 1299-1305.
- 釣木澤尚美, 秋山一男(2007). 小児喘息の成人へのキャリーオーバーの予防. 小児科, 48(1), 25-35.
- 増田敬(2008). 喘息を難治化させないために—キャリーオーバー—. 日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会誌, 6(1), 60-65.

XI. 炎症性腸疾患

- 藤沢知雄, 蜂矢正彦(2000). <小児期から成人, そして次世代へ>消化器疾患. 小児内科, 32(12), 2166-2169.
- 濱田貴幸, 林奥他(2000). 小児潰瘍性大腸炎の長期予後. 小児外科, 32(11), 1183-1187.
- 山本隆行, 田中光司他(2000). 小児クローン病の長期予後. 小児外科, 32(11), 1188-1192.
- 高添正和, 酒匂美奈子他(2005). 小児IBDのキャリーオーバー. 小児看護, 28(9), 1145-1150.
- 吹田麻耶, 鈴木純恵(2007). クローン病者の食事を通じた他者との関わりの体験. 日本難病看護学会, 12(2), 147-154.

XII. 神経・筋疾患

1. 進行性筋ジストロフィー

- 仲谷剛, 井上謙次郎(1991). 筋ジストロフィー患児の quality of life. 小児内科, 23(8), 101-104.
- 浅倉次男, 鈴木亜紀他(1993). 進行性筋ジストロフィー症児(者)の生きがいを求めて. 特殊教育学研究, 31(3), 63-67.
- 近藤久央(1995). 進行性筋ジストロフィー児の自己形成に関する考察—思春期の子どもの「お話づくり」の分析を通して. 国立特殊教育総合研究所研究紀要, 22, 119-127.
- 岩井健次(1996). 筋ジストロフィー入院患児の病気に対する自覚の過程と心理的援助. 特殊教育学研究, 33(5), 1-6.
- 北川彰一(1996). 筋ジストロフィー入院患者に対する学校教育の課題とその一般的意義. 育療, 3, 20-24.
- 山田栄吉, 石川豊江他(1996). シンポジウム:筋ジストロフィー児の生活の充実に向けて. 育療, 5, 20-24.
- 深川常雄(1997). 在宅筋ジストロフィー児の生活の現状と課題. 育療, 7, 51-57.
- 上保隆夫(1999). 筋ジストロフィー生徒に対する本校高等部の取り組み—卒業後の生活の充実を図るための指導. 育療, 14, 28-32.
- 高橋淳子(2000). 進行性筋ジストロフィー児の生きる意欲と指導. 育療, 18, 2-9.
- 長尾秀夫(2001). 神経筋疾患をもった子どもが在籍する通常の学校への医学的・教育的支援のあり方. 脳と発達, 33, 307-313.
- 長尾秀夫(2001). 筋ジストロフィー児の療育について. 療育, 42, 8-12.
- 長尾秀夫(2002). 神経筋疾患をもった子どもが在籍する通常の学校への医学的・教育的支援のあり方. 小児科, 43(5), 661-667.
- 埜中柁哉(2003). 筋ジストロフィー研究から学んだこと. 療育, 3-15.
- 浅倉次男(2005). 進行性筋ジストロフィー. 小児看護, 28(9), 1209-1215.
- 曾我部由里, 高見沢智子(2005). 「ワークショップまごころ」の試み—筋ジストロフィーの卒業生の就労. 育療, 32,

10-14.

- 榎中征哉(2005). パソコン通信を通しての社会的自立—筋ジストロフィーの人達とのふれあい. 小児看護, 28(9), 1311-1314.
- 小村三千代(2006). 進行性筋ジストロフィー症の子どもの意思と欲求への看護師の気づきと関わり. 日本看護科学会誌, 26(2), 31-38.
- 小長谷正明, 井上由美子他(2006). Duchenne型筋ジストロフィーの主観的QOLの変化—1992年と2004年の比較. IRYO, 60(2), 743-749.
- 山元恵子(2006). 筋ジストロフィー患者の病からの学びと障害受容との関連性—X氏の場合. 大阪府立大学看護学部紀要, 12(1), 103-113.

2. てんかん

- 笠松章, 平井富雄他(1968). てんかんの社会精神医学—昭和39年全国調査より. 神経進歩, 12(3), 175-182.
- 懸田克躬, 直居卓他(1969). てんかん患者の社会的背景について: その(1)—実態調査を中心として. 精神医学, 11(2), 117-124.
- 渡辺敏也(1974). 社会適応状況からみたてんかん患者の実態. 精神医学, 16(12), 1061-1070.
- 久郷敏明, 福間満美他(1993). てんかん患者の結婚・就労状況. 精神医学, 35(9), 943-950.
- 橋本和明, 和田一丸他(1993). 通院てんかん患者の就労状況—とくに法的制限に注目して. てんかん研究, 11(2), 174-177.
- 佐伯祐一, 古賀寛他(1993). てんかん患者の社会生活の状況—九州大学附属病院精神科外来通院患者について. 臨床精神医学, 22(7), 1039-1045.
- 北原久枝(1995). 成人期へキャリアオーバーした小児てんかん診療のポイント. 小児内科, 27(8), 96-100.
- 山田哲也(1995). てんかんの病名告知—「てんかん」の病名を知らせるか否か. 小児内科, 27(8), 140-143.
- 三宅捷太(1995). てんかん児のより良い学校生活のための医療の役割—現状と展望. 小児内科, 27(8), 144-149.
- 久保田英幹(1995). てんかん患者に対する社会的援助. 小児内科, 27(8), 150-155.
- 小林繁一(1995). <小児から内科へのキャリアオーバー診療>てんかん. medicina, 32(2), 298-300.
- 伊藤美樹子, 山崎喜比古他(1998). てんかんをもつ人の「てんかんであること」に伴う経験の質的分析—病気を匿すことを中心に. 保健医療社会学論集, 9, 30-43.
- 椎原弘章(2000). <小児期から成人, そして次世代へ>神経・筋疾患—てんかん. 小児内科, 32(12), 2157-2161.
- 満留昭久(2000). <小児痙攣性疾患の最新の治療法>小児から成人に移行する場合の対策. 小児科, 41(8), 1427-1433.
- 原美智子(2001). <成人に達した小児疾患患児・者のケア>てんかん. 保健の科学, 43(11), 828-831.
- 麻生幸三郎, 祖父江文子他(2002). 第105回日本小児科学会学術集会シンポジウム1: 小児慢性疾患の長期経過とケア—成育医療の視点から, 小児期発症てんかんの長期経過とケア. 日本小児科学会雑誌, 106(11), 1583-1588.
- 原美智子(2003). てんかん. 小児科, 44(10), 1497-1503.
- 井上有史, 西田拓司他(2005). 小児てんかんの精神医学. 児童青年精神医学とその近接領域, 46(2), 69-87.
- 原美智子(2005). てんかん. 小児看護, 28(9), 1197-1203.
- 小国美也子, 斉藤加代子(2005). 慢性疾患を抱えた子どもたちの思春期—とくに, てんかんについて. 小児科診療, 68(6), 1081-1085.

3. 脳性麻痺

- 吉岡隆之, 落合幸勝他(1998). 脳性マヒ者の自殺5例の経験. 小児の精神と神経, 28(4), 271-273.
- 佐伯満(2000). 成人脳性麻痺のリハビリテーション—成人に至るまでの療育経過とその課題. Journal of Clinical Rehabilitation, 9(5), 437-442.
- 松本誠司(2002). 脳性マヒの私の生きる道—障害の受容・自立のプロセス. 障害者問題研究, 30(3), 231-235.
- 馬越裕美, 長尾秀夫(2004). 神経筋疾患のQOL(人生の質)に関する質問紙調査. 特殊教育研究, 41(5), 483-491.
- 馬越裕美, 長尾秀夫(2004). 神経筋疾患のQOL(人生の質)向上を目指した支援の実践. 特殊教育研究, 41(5), 493-502.
- 佐鹿孝子, 深沢くに子他(2005). 親が障害のあるわが子を受容していく過程での支援(第3報)—高等学校3年生の親への面接による考察. 小児保健研究, 64(3), 461-468.

穴倉啓子(2005). 脳性麻痺. 小児看護, 28(9), 1204-1208.

4. 重症心身障害

前田晶子(1996). 社会参加のために—重症心身障害児のこどもの場合. 育療, 3, 37-47.

栗秋美樹, 松石豊次郎(2003). 成人に達した発達障害児(者)への対応—現在そして未来. 小児科, 44(2), 263-270.

澤田法子, 井上みゆき(2006). 重症心身障害児(者)施設の看護師が語る小児期からのキャリアオーバーに関する問題. 第37回日本看護学会論文集(小児看護), 251-253.

5. その他

名倉由紀子(1996). 障害をもって生きること. 育療, 5, 48-49.

奈良間美保(2005). 二分脊椎でキャリアオーバーした人の成育看護. 小児看護, 28(9), 1254-1258.

XIII. 先天性代謝異常

松田一郎(1986). 慢性疾患管理の実際—フェニルケトン尿症およびその他の先天性代謝異常. 小児内科, 18(10), 141-146.

西垣敏紀(1998). 先天性代謝異常のキャリアオーバー. 小児科診療, 61(6), 1063-1069.

大和田操(2000). <小児期から成人, そして次世代へ>フェニルケトン尿症. 小児内科, 32(12), 2118-2121.

大和田操(2001). フェニルケトン尿症の長期予後. 小児内科, 33(7), 915-919.

大和田操(2001). 先天性代謝異常症の長期管理. 保健の科学, 43(11), 842-847.

XIV. 染色体異常

池田由紀江, 橋本創一(1992). 思春期以後のダウン症候群の発達心理. 小児内科, 24(11), 1691-1695.

山縣然太郎(1999). 特集:ダウン症候群, 成人期の課題. 保健の科学, 41(3), 196-201.

山縣然太郎, 武田康久他(2001). <成人に達した小児疾患患児・者のケア>ダウン症. 保健の科学, 43(11), 832-836.

岩本綾(2004). みんな同じ運命; 命の重さには変わりはない—Down症本人の立場から. 小児科診療, 67(2), 243-247.

藤村聡(2004). 染色体異常者の成人期の問題—成人期Down症の医学管理. 小児科診療, 67(2), 267-272.

長谷川知子(2004). <染色体異常の包括的ケア>本人への告知について. 小児科診療, 67(2), 235-241.

川目裕(2004). <染色体異常の包括的ケア>家族への告知と受容支援. 小児科診療, 67(2), 229-234.

泉川良範(2004). <染色体異常の包括的ケア>染色体異常児の療育的支援. 小児科診療, 67(2), 255-259.

岩本綾(2005). みんな同じ人間; 同じ運命—My Dream Came True. 小児保健研究, 63(2), 104-109.

XV. 内分泌疾患

新美仁男(1998). 小児内分泌疾患のキャリアオーバー. 小児科診療, 61(6), 1091-1095.

児玉浩子(2000). <小児期から成人, そして次世代へ>慢性甲状腺炎・Basedow病. 小児内科, 32(12), 2129-2131.

河野斉(2002). 第105回日本小児科学会学術集会シンポジウム1:小児慢性疾患の長期経過とケア—成育医療の視点から, 内分泌・代謝性疾患長期経過とケア. 日本小児科学会雑誌, 106(11), 1572-1577.

横谷進(2002). 低身長. 保健の科学, 44(4), 256-260.

堀川玲子(2005). 副腎疾患・性腺機能低下症. 小児看護, 28(9), 1155-1162.

XVI. 血友病

岡茂(1979). 血友病児の教育に関する意見と悩みについて—親および成人患者の見解. 大阪教育大学紀要, 28(1), 125-136.

飯塚敦夫(1995). <小児から内科へのキャリアオーバー診療>血友病. medicina, 32(2), 312-314.

別所文雄(2002). 血友病. 保健の科学, 44(4), 261-265.

紅林洋子(2005). 慢性疾患患者に対する心理的援助に関する一考察—血友病患児とのかかわりから. 児童青年精神医学とその近接領域, 46(2), 128-136.

XVI. 感染症

関矢早苗(1994). HIV・エイズ関係文献ガイド. 助産雑誌, 48(6), 490-494.

松岡弘(1994). 学校におけるエイズ教育<小・中・高>. 小児科臨床, 47, 57-62.

山田兼雄(1995). <小児科から内科へのキャリアオーバー診療> HIV 感染症. *medicina*, 32(2), 315-317.

田中雄二, 白木和夫(1995). <小児科から内科へのキャリアオーバー診療>肝炎ウイルスキャリア. *medicina*, 32(2), 320-322.

花房秀次(1999). 血友病と HIV 感染. 小児看護, 22(2), 193-198.

横田恵子(1999). 家族カウンセリング—HIV 感染児を抱える家族の特徴と心理・社会的援助のポイント. 小児看護, 22(2), 189-192.

稲垣稔(1999). AIDS とインフォームド・コンセント. 小児看護, 22(2), 183-188.

松本淳子, 武田敏(2003). 介入アプローチの差による HIV 感染予防行動における自己効力感の比較. 思春期学, 21(4), 379-387.

倉橋俊至(2003). 若年者における HIV/AIDS 感染の現状. 小児科, 44(12), 1997-2004.

國方徹也(2005). HIV 母子感染後. 小児看護, 28(9), 1192-1196.

佐藤武幸(2005). 学校, 親との連携とプライバシーの確保. 小児内科, 37(3), 354-356.

横田恵子(2005). 小児科における HIV カウンセリング—子どもと家族への心理社会的支援の枠組みを再考する. 小児内科, 37(3), 357-361.

栞原健(2005). 小児 HIV 治療におけるアドヒアランス. 小児内科, 37(3), 362-365.

野々山未希子(2005). HIV 母子感染者の援助. 小児内科, 37(3), 374-377.

外川正生(2005). わが国における小児 HIV/AIDS 診療の現況と問題点. 小児科, 46(4), 507-514.

XVII. 小児外科系疾患

小沼邦男, 梶本照穂他(1991). 思春期を迎えた鎖肛患者の QOL 評価. 小児外科, 23(12), 69-75.

羽金和彦, 佐伯守洋他(1991). 直腸肛門奇形症例の学校生活における諸問題. 小児外科, 23(12), 55-59.

岩井潤, 高橋英世他(1991). 鎖肛術後症例の排便状態と QOL. 小児外科, 23(12), 31-40.

宇津木忠仁, 土田嘉昭他(1991). 永久ストーマが必要となった小児外科患者の QOL. 小児外科, 23(12), 41-45.

駿河敬次郎, 宮澤隆一他(1991). 小児外科症例の術後 QOL に関する研究—主として患児の術後心理面および社会生活の面よりの検討. 小児外科, 23(12), 71-85.

小林昌和, 住山景一郎他(1995). <小児から内科へのキャリアオーバー診療>先天性胆道閉鎖症術後. *medicina*, 32(2), 324-327.

鈴木達也, 橋本俊他(1997). 鎖肛術後長期経過観察における問題点. 日本小児外科学会誌, 33(3), 495.

大島雅之, 吉永恵他(1997). 高位型直腸肛門奇形術後の長期予後—思春期から青年期をいかに過ごしてきたか. 日本小児外科学会誌, 33(3), 495.

後藤隆文, 青山興司他(1997). 鎖肛術後の長期フォロー(腎・尿路). 日本小児外科学会誌, 33(3), 496.

栗山裕, 川村健児他(1997). 小児期発症の思春期・青年期糖尿病潰瘍性大腸炎の経過. 日本小児外科学会誌, 33(3), 496.

長屋昌宏, 加藤純爾他(1997). 15 才以上に達した新生児期小腸大量切除症例. 小児外科, 29(5), 90-94.

鎌形正一郎, 林奥他(1997). 経過観察中に 16 歳を超えた症例をどうするか. 小児外科, 29(5), 73-76.

宮野武, 山高篤行他(1997). 先天性胆道拡張症—小児および成人例の検討. 小児外科, 29(5), 110-114.

真田裕, 平井慶徳他(1997). 成人に達した短腸症候群. 小児外科, 29(5), 95-100.

臼井規朗, 井上正宏(1997). 成人に達した食道閉鎖症例の検討. 小児外科, 29(5), 77-82.

西寿治, 山本弘他(1997). 高インシュリン血症に対する外科治療後の問題点. 小児外科, 29(5), 115-118.

岩淵眞, 内山昌則他(1997). 小腸超広範囲切除例の栄養管理の評価と問題点. 小児外科, 29(5), 83-89.

- 渋谷温(1997). 副腎原発摘出10年後に頭蓋内に再発した神経芽腫. 小児外科, 29(5), 119-124.
- 上井義之, 荒木夕宇子他(1997). IV期 Wilms 腫瘍の長期生存例—肝転移と肺転移のみられた症例の治療経過と晩期障害. 小児外科, 29(5), 135-139.
- 駿河敬次郎, 角田晋他(1998). 術後排便障害の長期フォローアップ—QOL 特に人間学的検討. 小児外科, 30(1), 49-53.
- 中野美和子, 佐伯守洋他(1998). 20歳を越えた直腸肛門奇形患者のQOL. 小児外科, 30(1), 44-48.
- 小沼邦男, 谷内真由美他(1998). 直腸肛門奇形術後患児自らが評価するQOL—思春期を迎えた34名の検討. 小児外科, 30(1), 101-105.
- 仁尾正紀, 大井龍司(1998). 先天性胆道閉塞症のキャリアオーバー. 小児科診療, 61(6), 1078-1083.
- 中野美和子, 佐伯守洋他(1999). 思春期以降における胆道閉鎖症の諸問題. 小児外科, 31(3), 286-290.
- 仁尾正紀, 大井龍司他(1999). 胆道閉鎖症術後長期生存例の問題点—20歳以上症例の検討. 小児外科, 31(3), 291-296.
- 佐伯守洋(2001). 小児外科術後成人期へのキャリアオーバーについて. 日本小児外科学会誌, 37(7), 1009-1018.
- 中野美和子, 黒田達夫他(2001). 小児期に造設された永久ストーマ患者の思春期から成人期にかけてのケア. 日本ストーマ学会誌, 17(2), 6-12.
- 溝上祐子(2001). 成人期を迎える小児オスメイトの諸問題. 日本ストーマ学会誌, 17(2), 13-19.
- 松原康美(2001). 思春期にあるオスメイトの心の問題とケアの継続性. 日本ストーマ学会誌, 17(2), 20-26.
- 中野美和子, 黒田達夫他(2002). 小児外科キャリアオーバー患者の問題点. 日本臨床外科学会誌, 63(増刊), 199.
- 倉本秋, 北村聡子他(2002). 成人期を迎えるオスメイトのトータルケア. 日本ストーマ学会誌, 17(2), 27-33.
- 藤澤知雄, 乾あやの他(2002). 小児生体肝移植後の患児・家族のQOL. 小児科, 43(4), 441-449.
- 阿曾沼克弘, 猪俣裕紀洋(2003). 成人する小児外科疾患および肝移植術後症例のフォローについて. 治療, 85(9), 2579-2584.
- 岩村喜信, 青山興司他(2006). 直腸総排泄腔瘻術後長期経過観察—性機能について. 小児外科, 38(8), 994-997.
- 肥沼幸, 新井勝太他(2006). 胆道閉鎖症術後の妊娠症例の臨床経過とその検討. 小児外科, 38(10), 1195-1206.
- 小島祥敬, 林祐太郎他(2006). 男子不妊からみた停留精巣の妊孕性. 小児外科, 38(10), 1248-1251.
- 伊藤直樹(2006). 小児の性器異常と生殖予後—停留精巣症例における妊孕能の検討. 小児外科, 38(10), 1244-1247.
- 仁尾正紀, 大井龍司他(2006). 成人期に達した胆道閉鎖症術後の症例の問題点と対処について. 小児外科, 38(8), 1201-1206.
- 橋都浩平(2006). フォローアップの哲学. 小児外科, 38(8), 923-924.
- 石川真理子(2007). 小児期に鎖肛の治療を受けた患者の青年期移行の生活. 小児外科, 38(10), 1181-1189.
- 西田みゆき(2008). 小児外科の疾患患児の疾患とともに生きる過程. 小児保健研究, 67(1), 41-46.

ⅩⅩ. その他

- 澤田和美(2000). 'Resilience' の小児看護への適用—たくましく生きることへの支援. 臨床看護研究の進歩, 11, 20-26.
- 福嶋義光(2002). 第105回日本小児科学会学術集会シンポジウム1: 小児慢性疾患の長期経過とケア; 成育医療の視点から, キャリアオーバー患者の母性・父性医療—遺伝カウンセリングを中心に. 日本小児科学会雑誌, 106(11), 1599-1602.
- 野間俊一, 林晶子他(2005). 生体肝移植児童青年期症例に対する精神医学的サポート. 児童青年精神医学とその近接領域, 46(2), 20-29.
- 山本俊至(2006). 小児病院に通院を続ける青年期先天性奇形症候群者を対象とした在宅医療福祉の実態調査. 小児保健研究, 65(4), 600-604.
- 星野健(2008). 生体肝移植の長期移植と問題点. 小児科, 49(13), 1967-1973.

受付日 2008年9月17日 採用決定日 2009年2月6日